

曾<sup>そ</sup>

我<sup>が</sup>

會<sup>かい</sup>

稽<sup>けい</sup>

山<sup>ざん</sup>

## 解題

享保三年七月十五日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松門左衛門(時に六)である。

近松はこれまでに曾我物を作つた事が十種に及んでゐる。本曲はその後を受けて曾我物最後の傑作で、五段に分れてゐる。阿古屋の前・榎原平次景高・榛谷四郎重供・常夏・巴御前・蒲の入道・白崎八平次などの新人物や、裾野の紋盡しなどを取入れ、建久四年五月二十八日寅の一點(午前四時)から、同二十九日明け七つ(午前四時)までの出来事を脚色して、巧に前作との重複を避け、各段とどりの趣向を凝らした。其の第四段は、復讐の快舉を首尾能く爲遂ける場面であつて、それに關聯する各人の心々を寫して、ふるひ附くやうな靈腕の匠を見せてゐる。

## 實説

曾我十郎祐成は幼名を一萬といひ、伊東祐親の孫で、五郎時致の兄である。五歳の時實父河津祐泰が赤澤山の狩倉の後、工藤祐經の爲に殺された。よつて母は二子(祐成・時致)を携へて曾我祐信に再嫁した。二子は深く祐經を恨んで復讐の念に燃えた。源頼朝は祐經を愛し、又嘗て事によつて祐親を怨んでゐたので、祐信に諭して二子を鎌倉に引かせた。畠山重忠・和田義盛は二子を憐んで頼朝に哀訴したので、二子は漸く死を免れた。これより二子は深く晦匿して、大磯・黄瀬川・三浦の邊をさまよひ、屢々祐經を覘つたが、手を下す機會がなかつた。建久四年頼朝が富士裾野に獵した時、祐經も之に従つた。二子は決行の時來れりといふに喜び、五月二十八日の雨夜に乗じて假屋に亂入し、名乗をあげて祐經を斬殺し、以て年來の恨みを晴した。かくてなほ營中に十數人を斬つたが、祐成は遂に仁田四郎忠常の爲に殺された。時に年二十二。

曾我五郎時致は幼名を箱王といひ、祐成の弟である。三歳の時實父河津祐泰が工藤祐經の爲に殺された。其の後母に従つて曾我祐信に養はれたが、源頼朝に忌まれて鎌倉に引かれ、將に斬られようとする時、畠山重忠・和田義盛の哀訴によつて漸く死を免れた。既にして其の身を匿す爲に、母の言葉に従つて箱根山の僧行實の弟子となつた。然し彼は僧となるを嫌ひ、十七歳の時

曾我村に歸つて兄に請ひ、北條時政について元服し、名を時致と改めた。そして兄と共に窺に父の仇祐經を狙ひ、建久四年五月二十八日の夜富士裾野の營中に亂入して讎を報じ、小舎人五郎丸の爲に擲められた。頼朝は其の意氣を愛して之を助けようとしたが、祐經の子犬房丸の哀訴によつて之を殺した。時に年二十。

工藤左衛門祐經は幼名を金石丸といひ、伊東祐次の子で、曾我二子（祐成・時致）の從祖父に當る。平重盛に謁して左衛門尉となり、京に宿衛して工藤一薦と稱した。祐經が在京中に、伊東祐親の爲に彼の采邑を奪はれたので深く憤怨し、遂に家僮に命じて、祐親の子祐泰を殺させた。其の後彼は源頼朝に仕へ、寵用されて頗る權威があつた。建久四年頼朝に從つて富士裾野に狩し、五月二十八日の夜曾我二子の爲に殺された。

## 影 響

曾我兄弟が常に心を一にし、具さに辛酸を嘗めて志益と堅く、遂に不倶戴天の讎を報じて、父の亡靈を地下に慰めたのは、鎌倉將士の深い同情となつた。源頼朝も曾我二子を憐んで、二子の爲に曾我の莊の租を除いて、其の冥福を修めさせる料とした。鎌倉幕府の方針が斯くの如くであつた爲、世擧つて二子の志を賞揚し、世を経て其の名彌と高くなり、舞曲にも謡曲にも淨瑠璃にも歌舞伎にも、曾我物が頗る多い。室町時代中期前には「曾我物語」成り、「大日本史」には曾我兄弟を孝子傳に收めた。近松も亦「曾我會稽山」の妙文を作つて之を激賞した。明治になつて櫻痴居士は、この「曾我會稽山」を改めて「十二時會稽曾我」(明治二十六年五月歌)を作つた。

復讐事件に於て、曾我兄弟と赤穂義士との快擧は、兒童走卒も之を知らぬ者なく、賞讃盡きる時がない。富士裾野の曾我二子の墓と、芝泉岳寺の赤穂義士の墓とは、忠孝の英靈を弔ふ行人の、手向ける香煙が絶えず立ちのほつてゐる。

第 一 (竹取の間。源雄が北の丸に行く途中。北の丸)

登場人物の主な者

御 臺 所(源頼朝の室) 中原吉之の妻 阿古屋の前(工藤一蘭祐經の妻)

巴 御 前(和田義盛の室。朝比奈三) 常 夏(本多次郎近經の妻) 浦の入道源雄(俗名源範頼)

梶原平次景高(頼朝近侍の俊臣) 鬼 王(曾我兄弟の家來) 犬 坊 丸(工藤祐經の二子)

八 幡 三 郎(祐經の郎黨) 朝比奈三郎義秀(巴御前の子) 銀 杏 御 前(畠山重忠の室)

榛谷四郎重供(頼朝近侍の臣。祐經と相聲) 二宮太郎安清(曾我兄弟の姉御) 其の他大勢

梗 概

建久四年五月源頼朝が富士裾野の狩に出た留守中の二十八日寅の一點(午前四時頃)、鎌倉御所では虎の御門を開き、頼朝近侍の諸臣の妻女等が、竹取の間に伺候して御臺所に拜謁をする。庭上には富士野の狩場から送つて來た數多の獲物が並べてある。中原吉之の妻は御臺所の仰を承つて、狩場で功を立てた者を記した帳面を披き、大友の市法師・秩父の六郎・仁田四郎忠常・長沼五郎・土肥彌太郎・盛長・小山判官・淺利與市・岡部六彌太・兒玉の太郎・安田三郎・竹の下の孫八左衛門・宇佐美の左衛門等が、それらに麋・鹿・猪・狼・熊・兎・山猪・狐などを射留め、或は切殺した事を述べて、「外に牡鹿一頭、これは工藤左衛門祐經が大腹を射、本多次郎近經が草分を射たので、近經に六分の勝はあれども、鹿論未だ決せず、二本の矢は射附けの通り、よつて終りに記す。御狩場の別當和田義盛判」と讀上げた。伺候の妻女等は、各々我が夫の武藝を己が手柄のやうに喜び、御臺所も御機嫌がよい。

祐經の妻阿古屋の前が進み出で、「秩父の郎等近經が、我が夫祐經と鹿論をするさへ身分を辨へぬ無禮者なるに、その近經が六

分の勝とは義盛が依怙負をなさる。書いた物は後に残るから聞捨にはされませぬ。祐經一人が射留めたと書き改めて下され」といふ。義盛の室巴御前これを聞いて、「これ阿古屋殿、近經は秩父の家來なれども、武藏源氏の名ある者。軍の場数は御出頭の言葉が過ぎましたぞ」として、阿古屋の前の膝許にゐざり寄る。阿古屋顔色を變へ、「近經は昔が何であらうと今は秩父の歩若黨だ。貴女とても昔をいへば朝日將軍木曾殿の御部屋御臺。それを和田義盛が大力の子種を取らうとして妻とされたので、今は我等と同輩。夫が射た矢には金泥で氏名が入つてゐるに、近經の矢には名も記さぬ稽古矢で狩場の法を知らぬ。何でも書き改めて貰はねばなりません」として張臂となる。

末座にゐる近經の妻常夏、「これく阿古屋殿、貴女は我が夫を身分を辨へぬ無禮者と申されたが、それなら戰場でも目上の敵には太刀打も無禮だとして、後を見せてお逃げなされるなあ。武士の道を御存じなく、差出口の批評は腹筋が縫れますわいな」と嘲る。御臺所聲高く、「皆共騒ぎを鎮められよ。老中でも是非を分ちかねた鹿論を女の批判に及ばぬこと。頼朝公の御弟蒲の入道殿が、幸ひ鎌倉に御滞在であるから、北の丸に御出でを願ひ、お捌きをお任せ申したい。巴よ良きやうに取計らへ」とて座を起つ。其の後阿古屋の前と常夏とは激論して揃み合ふ。巴つつ立つて、阿古屋の前と常夏とを抱締め、「さすが祐經殿の御秘藏だけあつて、肉附が柔かな。人中で我儘を言へばこの通り。痛いかく」と縮附ける。常夏も巴に抱締められて髪もしどろになる。源範頼は佛道に入つて法名を源雄といふ。六つ時(午前六時)頃召によつて駕籠乗物で來る途中、梶原平次景高が騎馬にて行くに逢ふ。景高下馬もせず聲を掛け、「それなるは蒲の入道殿な。工藤と本多との鹿論の扱ひの爲に北の丸に御出でか。出頭第一の工藤と陪臣の本多とは、其の身分が提燈に釣鐘でござる。少しでも本多に最負なされたら、其方のお爲もよくありますまい」とて、人を轟ともはいくくと、埃蹴掛けて行過ぎる。

折節曾我兄弟の家來鬼王路傍に蹲ひ、蒲の入道の乗物を禮拜し、景高の無禮な振舞を難じて、工藤を討取る爲に己が主人が千

辛萬苦する様を哀訴する。源雄「我も昔の範頼ならば力を添へようものを、今のこの身では詮方なく齒痒う思ふ」。鬼王「忝う存じます。曾我兄弟は今度の御狩を武運の時と思つて狩場に忍び入り、昨日の朝の山の狩に、祐経が丘を越す鹿を狙つて其の太腹を射た時、五郎時宗は茂みの陰から祐経を射ましたが、餘りに急いた爲、其の矢は祐経の竹笠をかすつて、鹿の草分にはつばと立込み、鹿は登れました。大力の時宗が射た矢は大きくて記名もありませす、矢の詮議とならうとする所を、本多近経が己が射た矢だと申立てました爲、時宗は虎口の難を遁れました。私の考では、この度の御狩に工藤を討漏しては、遂に討取る時はございますまいと存じます。何卒曾我兄弟の望みを叶へさせて下さるやう、偏にお願申上げます」と、頭を下けて涙にくれる。蒲殿も涙ぐみ、「いかにも不便に存する」とて、懐から二枚の木札を取り出し、「これは北條時政・大江廣元の兩印が捺してあつて、頼朝公の御前まで出られる割符だ。祐経は頼朝公を後楯として側を去らぬと聞いてゐる。曾我兄弟にこの割符を貸すからは、これを持つて頼朝公の御前に近寄り、潔く敵討を遂けて年來の無念を晴らせよ。必ず秘密々々」と、語つて別れる。鬼王は蒲の入道の乗物を目送し、伏拜んで有難涙に袖をしぼる。

巴御前は問題の鹿を北の丸の大廣間の庇に昇据ゑ、留守番の大小名等は遠侍に相詰めて、蒲殿の御出を待受けてゐる。梶原平次景高は、祐経の一千犬坊丸と郎黨八幡三郎とを引連れ、大廣間にのさばり出る。八幡三郎「景高公あの大きな矢を御覽なさい。小男の本多があれを射たとは思はれませぬ。察するに馬鹿力の曾我時宗が、食ふに困り小盗みしようと思ひ、狩場に紛れ入つて射た矢に違ひありません。それを和田殿は詮議もなさらぬ。とかく梶原殿御父子の御思案にかけねば、明白でない」とそやす。景高「オ、サ其の通り。何の事はない、今一度本多めに射させて見れば忽ち化の皮が顯はれる。この矢は景高が預かつた」とて、鹿に立つてゐる矢を抜かうとする。巴「何をなさる。其の矢に指でも觸るが最後其の腕を引抜きますぞ」と、言放つて腕捲りをする。其の姿は骨太々と、練絹に岩を包んだ如くである。梶原「女は相手にせぬ。さらば蒲の入道が來られて、どう捌かれるか見てみよう」とて、御書院の方へ行く。朝比奈三郎義秀之を聞き、景高を打たうとして柘の棒を提げ駈込むを、巴飛か

かつて其の棒を搦み、「こりやこの棒で誰を打つのか。殿中ですぞ騒いではなりません」と叱り附ける。義秀「今の梶原の雑言聞捨にならぬ。彼奴の頭を打碎かねば蟲が承知しませぬ。母様邪魔して怪我なさるな」と、棒を捻上ける。巴「打碎く程なら己れは頼まぬ。腕白者め又つめくして貰ひたいか」と、片足上げて棒を踏折し、義秀を投飛ばせば、義秀は泣面かいて、しをく次の間に入る。

やがて蒲の入道入り来り、鹿に目を留めて莞爾と笑ひ、天の香具山・畝火山・耳無山の戀争ひも、後に和睦した例を引き、「文武の道に達した工藤・本多の諍ひを、親しみの始めとして上下相和するが、源氏長久國家安穩の基だ」とて、和解にしようとする。梶原「いやくこの大矢を本多が射たとは疑はしい。この的矢は業の矢とて、親の敵を射るが故實だ。矢の主を詮議せねば濟まぬ事ぢや」と迫り懸ける。犬坊丸も八幡も聲を揃へて梶原の肩を持つ。義秀は忪へかねて飛出さうとするを、母「こりや又つめつめですぞ」と、睨附けられて引込む。

蒲の入道「業の矢の業は必ずしも悪業の業でなく、矢業よき義である。故に親の敵に限らず、鳥でも鹿でも射る事がある」。八幡「いや主人の祐經を曾我兄弟が親の敵と附狙ふと聞けば、念を入れるが誤りか」。蒲の入道「それだから頼朝公の許を離れず用心する祐經に、曾我兄弟がどうして近寄られよう」。梶原「さうは言はれぬ。祐經を妬む者が多いから、或は曾我兄弟に御前通路の割符を與へた者があるかも知れぬ。御身も其の割符二札受取つてゐられるが、御持か見せて戴きたい」。蒲の入道「其方に咎められて見せる源雄ではない」。梶原「されば見せられぬは怪しい。きつと曾我兄弟に割符を與へられたでござらう。いやはや蒲殿、蒲焼殿、蒲焼の鰻入道殿、ぬらくら抜けても抜けさせぬ」と、悪口の限りを盡す。蒲の入道腹に据ゑかねてくわつとなり、最早これまでと、一尺二寸の刀抜打に、梶原が烏帽子の前面を切落す。梶原は驚いて障子蹴破り逃げ込む。犬坊丸も八幡も逃げ惑ふを、蒲の入道は八幡を斬伏せた。巴は大聲を上げ、「蒲の入道殿仔細あつて、八幡三郎をお手討にされた。騒ぐな」。御臺に注進申せ。御用のない者は一人も入る事ならぬ」と叫ぶ。蒲の入道「梶原めを切損じて残念だ。けなけな曾我二子の爲に

捨てる命、出家の身の悦び。極樂淨土に導き給へ南無歸依佛」とて、腹かき切つて絶命された。行年三十五。

御臺所の使者畠山重忠の室銀杏御前その場へ駈附け、榛谷四郎重供は死骸を預り、二宮太郎安清は富士裾野へ急使となつて、蒲の入道殿の自刃と曾我兄弟の詮索とを報ずる事となる。安清は重供に曾我兄弟の味方する疑ひを抱かせぬ爲に、曾我二子の姉なる己が妻に離別狀を認め、家來に持たせて歸す。然るに榛谷はなほも承知せず、「富士裾野の使は何でも己がする」とて争ふ。この時義秀は母の許を得て飛んで出で、榛谷の兩腕を掴んで捻上げ、折から鳴る鐘の音に拍子を合はせて榛谷の頭を叩き割り、「梶原めを打碎かいで残念至極。どうで生かして置くべきか」と、一人ごちつつ母と共に御所へ赴く。

## 第 一 (二宮の邸宅、藤澤街道、藤澤寺)

### 登場人物の主な者

- 二宮太郎安清の妻(曾我二子の姉) 白崎八平次(安清の家來)  
 二宮太郎安清の腰元・下女等  
 國上の禪師坊(曾我二子の弟) 近江小藤太(工藤祐經の家來)  
 藤澤寺の僧侶數多 景高の下部數多  
 梶原平次景高(頼朝近侍の俵臣)  
 二宮太郎安清(曾我二子の姉) 二宮太郎安清(曾我二子の姉)

### 梗概

二十八日は不動明王の緣日に當るので、二宮太郎安清の妻は、夫が出仕の留守中不動尊を祭つて、夫の武運長久を祈り、且つ己が弟祐成・時宗が、親の敵討を爲遂げさせ給へと念願を籠める。折から家來の白崎八平次が慌しく歸り來り、「御免下さいませ。只今旦那から急用で参りました」。安清の妻驚き、「はて何の御用か氣遣はしい。御口上は何と」。八平次「同じ御奉公と申しまし

ても、かういふお使は辛う存じます」とて、暇の印に笄を巻込んだ離縁狀を差出す。安清の妻は之を受取り、讀んではら／＼と涙を流し、「さやうなお心とは知らず、今も夫の息災武運長久を祈つてゐた。御出仕までも睦じう語つたに、いつお心が變つたか恨めしや」とて、去狀を顔に押當てて身を投げ、聲をあげて泣く。あり合ふ腰元・下女等は様子は知らず、互に顔を見合はせて溜息つくばかりである。安清の妻氣を急ぎ、「これ八平次、どういふ譯で離別されるやら、何か申されはしなかつたか」。八平次「委細は存じませぬが、蒲の入道殿が曾我御兄弟に方人なされた爲、梶原殿から蒲の入道には謀叛の企があると申立てられて、御腹を召されました。旦那は其の事を御狩場へ注進する使者となつて、八つ(午後二時)までに達せよとの仰せを受けられ、榛谷四郎に妨げられて口論となりました。其の時に「暇の狀・印の笄を我が妻に渡せよ」と、申された外は何も存じませぬ」。安清の妻「ム、それでわかつた。安清殿はもう出で立たれたか」。八平次「いえ、私が参りますまでは、まだ御前で口論の最中でしたが、今頃はもう立たれたか存じませぬ」。

安清の妻はこれを聞捨てて直ちに立ち、脛高々と帯引締め、「誰か足早の女ども長刀持つて追附け」と、いひ捨てて駈出す。腰元等は慌てて、「里へお出ででございますか。どうぞお心を鎮めあそばして、殿の御歸りをお待ちになつてお詫なされるが、よからうと存じます」とて繩り附く。安清の妻は之を振放し、「妾が身の事は免も角も、その儘狩場へ遣りましては、今の恨みに勝つた歎きもあらうかと思ふ故、ちつとして居られぬ。八平次よ氣を附けて留守せい。皆の者にも頼むぞ」と、端女一人引連れて飛ぶ如くに駈け出る。

四つ時(午前十時)頃、藤澤のあたりの暑さは、草も木の葉も萎れて、涼風一陣千金の價がある。路傍に葭園うて杉葉を置き、笈の水を引入れて、水車の廻つてゐる心太の店があり、往還の旅人が立寄り憩うて行く。この店の主人は曾我二子の弟國上の禪師坊である。今度の御狩に曾我二子が親の敵工藤祐經を討取つて、潔く屍を野原に曝す時、其の骨なりと拾つて弔はうと思ひ、懸鬘を被つて姿を變へ、十日程前から此處に店を出したものである。

折から祐經の家來近江小藤太が鎌倉へ歸る途中、この店に立寄り、「こりやく亭主水をくれい。亭主「はいくお易いこと。然し水よりか心太をお召になれば、暑氣を去つて渴を止め、藥にもなります。店先に富士の巻狩の景色を人形で作り、水機關に仕掛けて御覽に入れます。サアく只今始まり」と、聲をかしく拍子取り、狩場の將士に心太の功能・料理などを言ひ掛けて面白う語る。そして往來を見渡し、「あれく乗物に綱附けて人足が引いて来る。急な用らしいが、あれでは腸が揉切れう」といふ間に、乗物は忽ち來て店の前に下される。其の乗物の中から白布の胴巻を引締めた侍が出で、「これく亭主。我より先に鎌倉から富士裾野へ行く早打は通らぬか。隠さずに申せ」。亭主「ハテ損も徳もない事に何を隠しませう。貴方様の乗物の外には、今朝から一つも通りませぬ」。侍「よしく水を一杯くれい」といふ顔を、小藤太きつと見て、「ヤアこれは梶原景高様」。景高「さいふは近江小藤太だな。よい所で行合つた。話す事がある近う寄れ」とて招き寄せる。

禪師坊はこれがかねて聞いてゐる敵の家來と心付き、様子を聞かうとして巫山戯た振をなし、景高の顔先へ皿に盛つた心太をによつと突出し、態と落して皿を割り、「これは御免なさりませ」とて逃入る。

景高「狩場に別條はないか、して貴方は何處へ行くのか」。小藤太「はい、主人祐經公から、本多との鹿論はどうなつたか聞いて参れと申附けられ、鎌倉へ参ります」。景高「さればなあ其の鹿論で降つて湧いた好運といふは、曾我味方の蒲の入道に辯舌を以て腹を切らせた。曾我兄弟の奴らにもこの筋から罪に落し、縛首にする思案。ただ一つ困つた事は、二宮太郎が其の事を御注進の使者となつて、八つ(午後二時)までに狩場へ行く筈だ。彼めは妻と離別して曾我との縁を切つたが、眉唾もので曾我兄弟を惡うは御前へ申すまい。そこで己が先斷をして、都合の好いやうに作つて申上げようと思ひ、只今狩場へ急ぐ所だ。二宮がまだ此處を通らぬは至極好都合だ。貴方は藤澤寺(寺號清淨光寺といひ、俗稱遊行寺。時宗の總本山)へ登り、住僧に逢つて、今日正午に八つ時の鐘を撞くやうに頼め。そして高い所から見下してゐて、早打と見たら八つ時の鐘を撞かせよ。それで己に分別があるのだが、若しも住僧が拒めば片つ端から引括つて、貴方が鐘を撞かれよ。下部を連れて急がれい」とて、心太屋に入る。

近江小藤太は下部を引連れて、數十丈の険しい山の上なる藤澤寺に攀登り、三保の松原・清見寺・漕ぎ行く釣舟などを脚下に望んで氣を晴し、住僧に面會を求めて、「工藤殿・梶原殿の御頼みである」として、「正午に八つ時の鐘を撞いてくれ」と所望する。住僧「これは心得ぬ仰かな。當山の鐘は二十里四方諸職人・諸商人・往來の人々の刻限を極め、君から寺領を頂戴してゐます。私に刻限を違へて鐘を撞くは、諸民を迷はす大罪になりますから、お望みに従ひかねます」と言はせもあへず、小藤太「御出頭の工藤殿・梶原殿の御頼みを聴かぬとは赦して置けぬ。家來どもよ、坊主奴ら一人も残らず引括れ」と言放ち、飛掛つて捻据ゑ、狼繫にして引立て奥へ入る。

折から海道をまつしぐらに土煙蹴立てて馳來るは、後に下女を従へた二宮太郎の妻、鉢巻を締め長刀を搦込み、前方に見附けた梶原の早乗物を、我が夫の乗物と誤認し、「これ／＼安清殿、何故の離別か。夫に振捨てられては人に顔が合はされませぬ。曾我の縁者だと傍輩の佞人等に言ひ廻されての去狀か。すぐに返事が聞きたい」として、長刀構へて立つ、其の顔には無念の涙が流れてゐる。

景高は之を聞いて、茶屋の床几から腰を上げ、長刀の柄をむすどと掴み、「この乗物を二宮と見違へて己れと名乗る業晒し。梶原平次景高を知らぬか」と呼ばはる。二宮の妻はつと驚き、飛び退つて身構へする。景高「こりや女、傍輩の佞人とは誰の事か。安清が今日の使も正直に言ふまいと思ひ、身どもが先駈して急ぐ御用に對して狼藉する女め」として、主従拔連れ打つて懸かる。二宮の妻「ヤア夫を抜く梶原め、長刀の刃を戴け」と、下女と共に切つてかかる。禪師坊飛出で、「ヤア望む所だ。こつちへ任せろ。心太商人の手竝を見よ」として、梶原主従を目懸けて山椒の粉・唐辛の粉を投附け、胡椒・芥子の水鐵砲を浴せれば、敵は鼻を突抜くくつしやめ・しやくり、辛い涙に目玉も飛んで、咽はひい／＼口はひり／＼、ひるんで逃げ散るを、禪師坊は餘さじと追掛ける。

折節中村宿の方から、馬に鞭打ち土煙を上げて來るは二宮太郎である。安清の妻は夫の馬に縋り付き、十間餘り引きずられて

も放さず。安清「時切りの急用の使だ。邪魔すな」と鞭を上ける。妻「今日まで我が夫を、二人の弟の失望の後見と心得、鐵石の權よりも頼みに思つた甲斐もなく、お暇とあるからは最早兄弟の事も頼まれぬ。怪しい身なれども河津が娘。道理が立たねば暇の状は受取りませぬ」と、恨めしげに見上ける眼には玉の涙が満ちてゐる。安清「聞かずや今朝北の丸で、曾我兄弟の事から蒲の入道の御切腹、鎌倉の騒ぎとなり、御詮議の筋目によつては曾我兄弟の一大事となる仔細あるにより、密かに老中にお願ひして八つ(午後二時)切りの使者を承る所、榛谷四郎が曾我の縁者の使は心許ないと争ふにより、曾我との縁を切り、他人となつて思ふやうに曾我二子を助ける爲の離別だ。この外安清に別心なし。それが嫌なら元の夫婦になりましょうが、曾我二子は助けられぬぞよ。必ず我を恨むな」とて、馬に鞭を上ける。妻「ハア、去られませう、離別して下され。曾我兄弟の力添へとは、涙がこほれて忝う存じますぞえ。思へば男も女も曾我一家の非運は、神佛にも見放されたか」と、しをれて涙にくれる。

折から撞出す鐘の音を、安清は指折つて數へ、「これはしまつた、早八つか。刻限に遅れては曾我も我も運命の盡き、悲しや」とちだんだ踏む。この時景高は下部數十人を連れて駈附け、「ヤア／＼二宮刻限に遅れて、御注進の手筈が違ふ、罪輕からず。檢使は梶原が承る。腹を切れ」とて詰め寄る。安清「頼朝公の御前で腹を切つて御覽に入れる。其方等の世話にならぬ」と駈出す。景高「腹切りかねる臆病者。家來どもよ、彼奴打殺せ」と叫び、二宮夫婦と入亂れて渡り合ふ。

いつの間にか禪師坊は、藤澤寺の巖頭に攀登つて大音上げ、「これ／＼粗忽なされな。時鐘が違つた」と呼ばはり、取附く梶原の下部等を掴んで投飛ばせば、斷崖から二宮の足元に轉け落ちる。安清は上を睨んで突立つ。轉け落ちる者どもは、小首を大地に打附けて、ぎやつとばかりに死ぬもあり、梶原の目の前にどうど地響打つて落ちるもある。景高怖れて逃げ失せる。禪師坊乃ち懸鬘を搔投り棄て、「これ／＼二宮殿。姉御前。空は曇つて太陽が見えねども、まだ午に傾かず。早く狩場へ御出で」といへば、二宮嬉しく、小藤太の首を切落し、馬を飛ばし驅けて行く。安清の妻と禪師坊とは、其の跡を名残惜しげに見送つて、泣いて別れる雨雲の、絶え間に漏れる鐘の聲、數は九つ(正午)、遠近に響き渡る。

第 二 (工藤祐經の假屋。曾我の里)

登場人物の主な者

工藤左衛門祐經(嘗て曾我兄弟の父河津三頼朝の龍臣)

八幡四郎(祐經の家來。八幡三郎の弟)

曾我五郎時宗(三歳の時に父が祐經の爲に殺さる。祐成の弟)

虎御前(大磯の愛女。祐成の愛人)

工藤祐經の郎黨數多

龜(曾我の家來。鬼王の弟)

園三郎(曾我の家來)

少將(化粧坂の遊女。時宗の愛人)

勢子數多

菊木瀬川の遊女)

曾我十郎祐成(五歳の時に父が祐經の爲に殺さる。時宗の兄)

曾我二子の母

京の小四郎(曾我二子の異父兄。無頼漢)

梗概

富士野の狩の真最中に、工藤祐經は木瀬川の遊女龜菊と床几を並べ、酒を酌みながら龜菊の機嫌を取つてゐる。そしていふに「お前の側を離れて、夜な〜鎌倉殿の所に寝るは、曾我兄弟が我を狙ふと聞くから、大人は危きに近寄らずで、用心の爲である。然る所鎌倉に残し置いた女どもが智恵を利かして、京の小四郎といふ曾我兄弟の種替りの兄の無頼漢を賺し、曾我の里の老母が方へ間諜に入れて置いた。其の者が内通によつて曾我の事は筒抜けだ。仕合はせな事は曾我の老母が病氣危篤で、二子はその死目に合ふ爲、既に曾我の里へ歸つたであらう。まづ一安心だ」といふ。

其の時八幡四郎が、鹿皮を被て柵を潜る曾我の家來團三郎を捕へ、縛して連れ来る。祐經「鹿を装うて嚴重な狩場の柵を潜るは、深い存念があらう、眞直に白状せよ。偽れば盜賊の刑に行つて恥かかすぞ」と腕附ける。團三郎「主人祐成・時宗が御狩拜見の爲、情ある大名達の組下に交り狩場に来ます。故郷では老母の病重り、二子を臨終の枕頭に寄せて、末期の水を受けたいと嘆かれるので、其の爲私が使となつて、夜前曾我の里を立ち急いで参りましたが、この儘では總木戸の御番所が通られぬ爲、

雜人の屠り棄てた鹿皮を被つて、柵を潜るを見附けられました。なう女郎様にはお知合ひのお方もありません。どうぞ曾我兄弟にこの趣を傳へて下され。折角使者となつて一生のしくじりを致しました」とて、玉の涙を流す。祐經「ムム老母の病につき、曾我二子を呼戻すとはなる程嘘ではない。其の外にまだ尋ねる仔細がある。鎌倉殿の御前へ引出せ」といふ。

折から五郎時宗は、どうして之を知つたか駈附け、勢子五六人を投飛ばし、團三郎の縛を引きちぎり、八幡四郎を蹴倒し、大音上げて「十郎殿ござれ」と呼ぶ。十郎駈附け、兄弟共に刀の柄に手をかければ、祐經の郎黨は主を討たすまいとして遮り騒ぎ立てる。團三郎「ア、旦那粗忽なされな。御老母の病俄に重り、御壽命今も計られませぬ。息苦しげに、今生の見收めに二子の顔が見たい。連れに行つても歸らねば、二子共に生々世々の勘當だ」と、申されるを聞捨てて駈附けました」と言ふ。曾我兄弟はこれを聞いて、折よく敵に出會ひながら老母の壽命もだし難く、茫然として途方にくれる。

時宗は遮二無二祐經に斬りかからうとするを、祐成は孝道を説いて之を諭す。祐經はこれに力を得て、「これ〳〵曾我兄弟よ、其方の父河津は流矢に當つたとも、俣野の五郎が射殺したとも云ふ。どうやら分らぬ親の敵を、我と心得て狙ふよな。よし〳〵さもしげに言譯はせぬ。さあ相手にならう。臆したか」と、足元を見ての廣言。母思ひの曾我兄弟は切齒して悔しがる。

龜菊は曾我兄弟に同情し、「お二人様、何と顔を赤めて無念さうに見えるぞえ。お侍の義に迫るも、浮世の戀に身を碎くも、命懸けるは同じ事。例へば酒の意趣ある中、さあ飲み伏せたと油斷させ、心を許す門立が思ひ懸けない朝込、引起して止めの杯。これを本望本酒の手柄といふわいな」と、笑つて其の座を寛げる。

其の詞に曾我兄弟は心を取直して去らうとすれば、祐經「暫く待て。孝心の程感じ入つた。祐經も縁者の端なれば、他人のやうには思はれぬ。近道を通つて歸れ。己が秘藏の名馬を餞ける。それに乘つて急いで歸れ」とて、外道月毛・波羅門栗毛を引出して與へる。祐經の深意は、曾我兄弟がこの暴れ馬に乗り、落馬して死ぬか不具になるか、恥かかさうとするにある。曾我兄弟も之を察し、神佛を祈念して暴れ馬に打乗り、「ヤア團三郎、汝は秩父殿。和田殿其外の方々へ禮を申述べて假屋を仕舞へ」とて、

馬に鞭をくれて駈出す。祐経は案に相違し、大口を明けて呆れながら之を見送る。折から響く鐘の音は八つ(午後)を報じる。

曾我の里なる老母は、夫に死別れてから二十餘年、貧苦と戦ひ憂さも忘れて、二子の成人を頼みに世を過し、今や本復の望なき病に罹り、陋屋から漏り来る風、そよと寝返る息つきも、これを限りの命と見えた。そこで二宮へ人を走らせても生憎留守であり、家來の團三郎は、富士野にゐる曾我兄弟に知らせの使となつて出で、家に居る者としては見舞に來た虎・少將と、京の小四郎ばかりである。小四郎「己は近頃來たばかり、二人のお嫁に母の介抱を頼む。まづ臨終の勸めく」といふ。兩女は心細さの胸詰らしく枕頭に差寄り、「おつつけ御兄弟がお歸りになりませう。念佛を唱へて後生をお願ひあそばせ」と涙ぐむ。老母「浮世の事は打忘れて念佛を唱へ、佛様たちのお迎を待たうと思つても、二子が氣に懸かり、妄執の闇に迷ひまする。どうして戻りが遅いぞ」ともがく。折節太陽は西に傾き、鐘の音は七つ(午後)を報じる。

仇は却つて情の馬、曾我兄弟が孝の鞭、難所の山越六里半、鳥の飛ぶやうに打過ぎ、馬を道に乗捨ててつと入る。虎・少將「ようお歸り下さつた。急いで母様の枕許へ」と、いふを二子は聞くも悲しく胸騒ぎ、「ヤ小四郎殿、深切な看病有難い」と一禮し、差足して老母に近寄り、「只今二人とも歸りました。北條殿から戴きました妙藥を召上られて早う本復なさりませ」と、涙を隠して述べる。老母「ヤア二人とも戻つたか、近う寄せ」と、紙帳の中から手を出して二子の手首を握り、「虎御前・少將、いそいでこの紙帳を取つて下され」。虎・少將が「あいにく」と返事する間に、老母は紙帳を押退けて出る。其の顔色は元氣よく、病める人とは見えぬ。老母「ヤヨ二子よ、母が病とは汝等を狩場から呼戻す爲の偽りぢや。今度の御狩の供は、工藤左衛門祐経を討つ下心であらう。其の祐経はいふまでもなく、一國の大名・何百騎の大將。それを其方等が討たうとして忍び討ちに遭ふ時は、誰を恨むぞ。汝等の父河津殿は坂東一の勇者、兩國懸けた大名であつたが、欺し矢は詮方なく、あへない最期を遂げられた。これと思へば其方等の身が案ぜられて病になるわいの」と、かつばと伏して泣いたので、あり合ふ者も皆貰ひ泣をする。

祐成「恐れ入りました。敵討の事はふつと思ひ切ります。五郎はどう思ふ」。時宗不機嫌にて、「兄弟の分別が變つては、己は

返事に困る。どうなりと御返事なされ。老母は之を聞いて怒り、時宗に勸當を申し渡す。祐成は時宗に孝道を説いて之を諷し、老母に謝罪らす。母は喜び、「然らば今宵二子は、虎御前・少將と祝言せよ」とて、衣服を著替す。老母「ヤア小四郎、其方も出たい用もあらうから、今夜は歸つて重ねて来い」といひ渡す。二子は今宵ばかりの命と思ひ定めながら、母を慰める爲に虎・少將に連れられ、顔を赤めて奥に入り、酒宴の聲は外に漏れる。小四郎はこの有様を見て、敵討もおじやんになつた事と思ひ、其の旨を早速祐經に注進した。

兄弟は申し合はせぬに自から心一致し、皆どもの寐靜まるを伺ひ、差足して寢所を出る。そして兄弟行合つて、「兄上か」、「弟か」と互にささやき、今宵敵討を決行するを申し合はせ、心の中に母に對して今生のお暇乞を申し上げ、涙に連れながら互に書を認める。其の文に、今日まで育てられた母の恩を深謝し、母・虎・少將・箱根の別當・二宮の姉・禪師坊・鬼王・團三郎に對して、形見の品々を書き記して署名し、直垂姿勇まじう出で立たうとする。とたんに五郎が落し縁をがばと踏抜き、どつと落ちる。其の響に虎・少將目を覺し、虎「これは十郎殿が居られぬ」。少將「五郎殿も見えぬ」とて立騒ぐ。母聲を掛け、「其方等は里では遊女の身でもここでは武士の妻。夫が親の敵討をするに、母の目を忍んでも共に見立てて出してこそ武士の妻ぢや。この母は寐た振して、二子が書置するを見て涙にくれたぞや」とて、その不心得を諷す。

二子は庭に隠れて之を聞き、立ちも離れぬ夜の蟬、取附く露の崩れ垣、忍び音になく哀れさよ。母はなほ詞をつぎ、「病と偽つて二子を狩場から呼戻したのも、慘う辛う叱つたのも、敵の間諜となつて入込んでゐる大悪人京の小四郎に見せて、敵に油斷させ、易々と我が子に敵討させよう爲であつた。老いて孝行な二子に別れる悲しや」と、袖を顔に押當てて咽び入る。やがて顔をあげ上衣を脱けば、下には悟を開く墨染の五條袷。之を見た庭と上との二夫婦は、あつと感じて手を合はす。老母「いざ虎御前。少將よ、初夜の勤めの頃なれば、孝心な二子の菩提を祈らう」とて、持佛堂をさして行く。折から響く初夜の鐘は、諸行無常を告げ渡る。あはれ後の世に、孝子の手本と仰がれる曾我兄弟の首途は、かくも悲しく、また淋しいものであつた。

# 第四 (虎・少將道行・裾野の近邊・祐經の寢所)

登場人物の主な者

虎御前 (大磯の遊女。祐成の愛人) 少將 (化粧坂の遊女。時宗の愛人) 曾我兄弟の母

三浦・朝霧・奥州・岩崎・菅原・左門・花崎・山の井・陸奥・唐土・高橋 (虎・少將の朋輩の遊女)

龜 (木瀬川の遊女) 菊 (少將の親友) 曾我十郎祐成 (伊藤次郎祐近の孫。河津三郎の子。時宗の兄。二十二歳) 新開荒四郎 (夜廻り)

曾我五郎時宗 (河津三郎の子。祐成の弟。二十歳) 安西彌七郎 (夜廻り) 仁田四郎忠常 (頼朝の家來。勇士) 二宮太郎安清 (曾我兄弟の姉嫁)

本多次郎近經 (畠山重忠の家來。曾我兄弟の同情者) 工藤左衛門祐經 (十七年前曾我兄弟の父河津三郎を殺した。頼朝の寵臣)

德 (馬屋の侍) 竹 (馬屋の侍) 其の他頼朝の家來大勢

## 梗概

虎御前・少將は曾我の老母を馬に乗せ、曾我兄弟の跡を慕ひ、富士裾野をさして家を出で、提燈の明りで夜道を辿る。杜鵑空に啼いて無常をそそる。玉澤村・梅澤村・鞠子川を過ぎ、大磯の岐路まで来ると、鞭をくれても駒が動かなくなる。「いやなう駒に咎はない。この分れ路こそ夕暮毎に、しやんと召されて通はれた、其のお二人とは乗手も道も、變ると知らで止まる可愛さよ」と、思ふも涙の種。三島の宮居を伏拜み、駒の歩みに任せて裾野の狩場に近寄り、馬から下りて歩む。

折からちらつく提燈の數々が見え、女交りの聲が聞えて来る。次第に近づくにつれて、それ／＼の駕籠に附けた提燈の定紋によつて、木瀬川の三浦・朝霧・奥州・岩崎・菅原、茨木屋の左門、輪違屋の花崎、一文字屋の山の井、仙臺屋の陸奥、大和屋の唐土・高橋などの遊女で、虎・少將の朋輩である事が知れ、互に言葉を交はして行過ぎる。

その後から木瀬川の龜菊の紅葉流しの紋提燈が見えて来る。虎・少將「これ龜菊さん、虎・少將だ。お尋ねしたい」。龜菊「駕籠屋さん、駕籠を留めてよ」といはれて駕籠舁は、駕籠を草の中に下す。龜菊「なう逢ひたかつたお二人様」。虎・少將「私等も逢ひたかつた。して御兄弟はどうぞい」。龜菊「さればいな、御運の拙い御兄弟。お袋様の御病氣とて曾我にお歸りになつたぞえ」と語り、京の小四郎が祐經へ内通、二宮の早打、蒲の入道の切腹、假屋々々の騒ぎの事などを話して、「その爲頼朝様も今宵八つ(二)にお立ち、鎌倉へお歸りと極りましたが、若し雨が少しでも降つたら、明日朝五つ(八)にお立ちが延びるけな。私等がやうに假屋々々へ呼ばれた女郎衆も、急にお暇が出ました。さても御運の悪い御兄弟。私がいかに庇はうと思つても叶ひませぬ。其方たちお二人のお心を察して涙がこぼれる。何も時の運と思つてあきらめなさんせ。私ももう二三日狩場に居れば、白鬼の子を貰ふのであつたものを、なにも時節と思はんせ。その中に又お逢ひ申しましょ」とて別れた。

老母「龜菊のお話聞きました。言ふこと爲すこと手違ひとなり、氣も心もたまりませぬ。長らへた命が怨めしい」とて、念佛の聲と諸共に自害しようとする。虎・少將は老母に飛附いて刀をもぎ取り、老母を慰めて思ひ止らせる。虎「今宵雨さへ降つたら明朝五つ(八)のお立ちとや。其の間に御兄弟が本望を遂げられるは必定。さあ三人が命に代へて雨乞ひを致しましよ」とて、諸神に祈願を籠めて観音經を讀上げる。虎・少將は小指を食裂き、流れる血しほ玉なす涙を、袖に浸して虚空に散し、肝膽を碎いて禮拜する。よにも哀れな極みである。諸天諸神も感應あつて、忽ち黒雲覆ひ電光閃き、俄に大雨となる。三人は有難涙にくれて、雨の中を狩場の方へと焦れ行く。

源頼朝の鎌倉歸りは雨の爲に延びた。假屋々々の人々は晝の疲れに寐靜まり、雨の音のみ聞えて、燈火の光微かにまたたく。時節よしと祐成は、群千鳥の直垂の袖を結んで肩に掛け、黒鞆卷の太刀を佩き、上に青合羽を着て竹の子笠を被り、松明を翳して先に進めば、時宗は紙合羽の下に揚羽の蝶の直垂を着、友切丸の劔を肩に打掛け、笠を被つて後に續く。祐成「ヤア時宗、不俱戴天の誓を討取るは今なるぞ。蒲殿から拜借したこの割符を以て、頼朝公の膝下まで通り、祐經の瘡所に斬入らう。假屋には定

めて遊女も多からう。逸つて無益の殺生すな。雨はいつも降りながら、今宵の雨はいとど身に染む。思ひ出すは母上、我等の討死を聞かれたら、いかに數かれるであらう」と、涙に眼を曇らす。時宗「仰しやるまでもござらぬ。祐經を討つは案の内。鬼神にも怯まぬ心にも、今宵の雨は眞底通つてわぢく」と物悲しうなる。敵と出會へば、いづれ別れくに死を遂げるでござらう。お別れの杯をお受け下され」とて、懸烏帽しに雨を受溜めて兄にさす。祐成「この世の縁はこれ限りなれども、後の世に未了の因を結ばうぞよ」とて、さらりと乾し、雨を受溜めて弟にさす。時宗取つて押戴き、さらりと飲み乾し、「兄は親の代りと聞けば、母上の御杯も之に籠り、天の甘露・仙家の漿もこの酒には勝りませぬ」とて、母と妻とが雨乞の、血の涙と知らぬも哀れである。

五月雨の一しきり過ぎ行く後は、空ざりけなく澄み渡り、北斗もきらつく。曾我兄弟は夜廻りの安西彌七郎・新開荒四郎に誰何され、首に懸けた通路の割符を見せて、「祐經殿へ御用の使だ」といへば、安西・新開恐れ入り、其の道を教へて去る。折から本多次郎近經は曾我兄弟と祭して近附く。曾我兄弟「誰だ」。近經「波に揺らるる沖つ船、知る邊の磯は此方ぞ」とささやく。曾我兄弟「重忠公の御情、又貴方の御懇情、御禮の申しやうもござらぬ。今宵愈々討入る所存なれば、今生では重忠公へも御禮申し上げ難く、宜しく御執成を頼み申す」。近經「委細承知仕る。祐經の寢所は此方でござる。心をおちつけて御本望を遂げ給へ」。曾我兄弟「御恩の程いつの世にか忘れ申すべき。この割符二枚は情深い蒲殿から拜借しましたが、我等が持つてゐては御切腹なされた御身に疑ひがかかり、却つて恩を仇で報ずる事となる。貴方にお預け申す。宜しく御取計らひを頼み上げます」。近經「確に受取申した。御老母の事も疎略には存ぜぬから、御心配なざるな。武士の禮儀はこれまで。お別れ申す、名残惜しや」と、いひ捨てて假屋に入る。

曾我兄弟は天にも昇る心地して、互になつこと打笑ひ、祐經の寢所に躍入る。假屋々に間附けて、あわてふためく其の際に兄弟は、祐經を討取つて戸外に走り出る。祐成「年月の思ひに比べれば、敵を討つは易かりしな。餘りの嬉しさに心急いで祐經

に止めを刺すを忘れた」。時宗乃ち引返して祐經の屍に止めを刺し、「この世では敵となれども、佛の御手に救はれて極樂に往生せよ。南無阿彌陀佛」と、唱へて出る。祐成待受け、「逃けられぬにあらねども、それは武士の恥。潔く名乗つて討死しよう」。時宗「御尤」。祐成「伊豆の國の住人伊藤次郎祐近が孫、河津三郎が二人の子曾我十郎祐成」。時宗「同じく五郎時宗。親の敵工藤左衛門祐經を討留めたり」。祐成「頼朝公の御内に我と思はん人々は」。祐成・時宗「折合つて討留め給へ」と呼ばはつた。されど敵は騒いでただ物にぞ當り惑ふ。馬屋の徳竹「暗くて何にも見えぬ。松明出せ」と呼ばはれば、二千軒の假屋からてんでに火を附けて投出し、闇夜の裾野は忽ち晝の如くなる。

曾我兄弟は押寄せる敵を斬立てる。折から又降つて來た雨に松明の火打消され、木陰から武者一人、「先年富士の人穴に入つて、猛猪を乗留めた仁田四郎忠常とは我が事」と、名乗つて出たが祐成が立退かぬので、證方なう斬り結ぶ。この時又仁田四郎忠常と名乗る別人が現はれて、祐成の右の高股を切落す。祐成は犬居にとつと轉びながら、「時宗は何處ぞ。祐成は討たれた。死出の山にて待つべきぞ。さあ二人の中でいづれなりとも首を取られよ」といふ。然るに討手二人の争となり、前に仁田を名乗つた者は、其の實二宮太郎安清で、祐成を逼さうとしたものであつて、渡り合つた刀は石で切先を打潰してあつた。忠常之を見て、「あはれ二宮殿、最前からこの太刀で討つ真似をしたのか、アツア頼もしもと優しとも、武士の鑑ぞや」と感じ入る。安清も亦忠常の心に感じる。忠常「貴方のやうな誠ある縁者を持つた曾我殿原が、一生花も咲かなかつた天運の拙さよ」と嘆き、忠常も安清も落涙する。かくて忠常は祐成の懇望によつて首を打落す。折節曉の八つの鐘鳴り、鶏もなく人も泣くく、千鳥の直垂を裂いて首を包んだ。

## 評

第四段は、曾我二子の母や縁者知人の總てが、孝心深い二子に本望を遂げさせたい切な情を述べて、美しい人心を見せた名文である。そして曾我二子が本望を遂げた後も、縁者知人の義心を見せて武士の精神を發揮した。構想妙を極めて、邪魔になるや

うな不自然のものなく、詞章も場面に應じて或は雄健に或は流麗に、才筆を呵して言々涙があり匂々情がある。蓋し我が武士道劇の上乗な物であらう。

#### 第四 たら少將道行

○妻戀ふ鹿云々 秋になるに能く牡鹿が鳴いて牡鹿を呼ぶによつてかくいひ、歌にも多く詠まれてゐる。この文は、妻戀ふ鹿は死しても、其の毛は筆の穂に用ひられて役に立つといふのである。「和漢三才圖會」卷十五、筆の條に「今多所用者鹿毛也」。

○同じ裾野 曾我二子が富士の裾野に討死する。我もその同じ裾野で死なうと決心するのである。

○馬に任する道しるべ 「後撰集」戀五部の歌に「夕闇は道も見えぬふる里は、も三來し駒に任せてぞ來る」。

○是は若駒 「老馬道を知る」の然によつていふ。老馬の道しるべではなくて、これは若駒の道しるべである。然し「善手は老の結」とつづけた。

○双鏡 左右の鏡をいふ。こゝは諸共に馬に跨る意。

○力 提灯は夜道の力。

○今宵 五月二十八日の宵である。

○螢火 「ほたる」の「ほ」が火を意味する故に、更に「火を要せぬやうであるが、「和泉式部集」にも「螢火は木の下草も睡かす、五月の闇は名のみなりけり」など見えてゐる。

○亡き魂よ： 下交の樓 「拾芥抄」上巻に「魂は見つ主は誰とも知らぬども、結びとどめつしたがへの袂、誦此歌三所著衣妻」とあつて、人

妻戀ふ鹿の、身の果も、戀の文書く筆となる、在て甲斐なき老の身は死して身體の置所、同じ裾野と心ざし、馬に任する道しるべ、是は若駒乗手は老の、一人嫁二人踏みも習はぬ双鏡、さすが夜道の力とや、油煙も細き提灯に、足許ばかり照させて、萎れ出るぞ、哀れなる先は何處と、眺むれど、富士さへ見へぬ闇の夜の今宵一夜は十五夜の、月にぞ替へま欲しの影ちらら、ちらら、螢火か、いや兄弟の亡き魂よ、結び止めんと下交の、袂吹返す夜嵐に、はつと消へては狐火の我と我が身を迷はする雲より上の一聲や、又二聲や三聲とだにも鳴き捨て、魂を見た時に咒ふ歌とされてゐる。「下交」は衣服のしたまへをいふ。

○狐火 鬼火。狐が動物の骨などをくはへて草の中などに逃入る時、その骨から燐光を放つを見ていひ出した語であらう。

○雲より上の一聲 折しも雲の上に啼く時鳥の一聲。

○鳴き捨てて何方行くらん 「古今集」卷三「夏歌の部、紀友則の歌に、「五月雨に物思ひたれば時鳥、夜深く鳴きていづち行くらむ」。

- やよや待てなれよ冥途の鳥 「古今集」卷三夏歌の部、みくにのまろの歌に「やよや、待て山ほととぎす言つてむ、われ世の中に住みわねぬよ。」
- 冥途の鳥 ほととぎすをいふ。近松作「當流小栗判官」に「時鳥は冥途の鳥、しでの田長を啼くまかや。」
- 死出の山 冥途にある山で、人死すればこの山を越えて行くといふ。「山家集」に「時鳥なくこそは語らばめ、しでの山路に君しからば。時鳥の聲を聞いて、時鳥に曾我二子が討死して死出の山を越え行くを留めよと、願ふ親心とあはれである。」
- 秩父の山嵐 秩父連山から吹きおろす風。秩父連山は武蔵の秩父地方から甲斐に亙る連山をさす。
- 三保 清水市内。三保の松原は風景の美を以て聞えてゐる。
- 清見寺 駿河國麻原郡津町清見寺(せいけんじ)。臨濟宗。(見索引)
- かうく 鐘々であつて、鐘の鳴る音をいふ。
- 禮記樂記篇に「鐘聲鏗々以立節」。
- 玉澤村 伊豆國田方郡錦田村の大字で、箱根山西の幽谷、三高町の東一里にある。
- 關はあやなし梅澤村 「古今集」春上部の歌「春の夜の關はあやなし梅の花、色こそ見えん香やはかくる。」の中の句に據つて、梅澤村につづけた。「あやなしは文無し」の義。あやめ(文目)もわかぬ意。
- 梅澤村は相模國中郡吾妻村大字山西の舊稱。
- 鞠子川 相模國にある酒匂川の古名。
- 衣紋流し 脱つた鞠の衣紋を傳ひて落すをい

何方行らん、やよや待て汝よ冥途の鳥ならば、死出の山路に關据ゑて、先立つ我子留めよかし、心覺への、道程も左手は秩父の山嵐、松の響か磯波波か、晝なら三保か清見寺鐘かう、かうとはの聞え、猶も心を急がる、閃めく露の玉澤村、關はあやなし梅澤村二村過て行狂ふ駒の蹴上の、鞠子川衣紋流しの、ア、曲もなや、此駒の、道の巷に行泥み、打てどもあをれどもなど進まぬぞ歩まぬぞ、哀一足に千里もがなと焦るゝとは、思ひ知らぬか白月毛の、駒に恨の涙の鞭、打に甲斐こそ無かりけれ、いやなふ駒に咎は無し、此別れこそ大磯道、夕暮毎に御二人がしやんと召されて通路の、戀のしるべの馴れくし、今宵はそれに引替はり、乗手も道も變るとは、知らで留まる可愛さよ、御兄弟の御形見今一度里の方へと押向けて、引立見れば不思議やな元の如くに歩み行、引戻せば立留まり慕ふは誰ぞ、我が夫、我が子よ主の愛別れ共に悲しむ優しやと、鞍の前輪に纏り附、嘆けば共に聞入て、耳を伏せ尾を垂れて人諸、共に泣く涙己が、毛色も染めぬべし、歎くな駒に、精附てハイシイ、足柄越は風荒く、露を時繪の箱根山、今行道も、遂に行賽の河原の何時とても、大人童の隔なく、罪は重たし迷ひは深し、何か菩提の、

ひ、蹴鞠の遊びの曲名。

○曲もなや 面白くないよ。「曲」は曲折の義、なごやかなこと。この文は「衣紋流しの曲」から「曲もなや」につづけた。「蹴上」駒子川、「衣紋流しの曲」は、いづれも蹴鞠の縁語によつて文を飾つた。

○あふれども 馬を進ませる爲、馬上で面鏡を動かして馬腹を蹴立つれども。諸曲「鉢の木」に「打てどもあふれども、先へは進まぬ足騎車の」。

○白月毛 白に黒みのさしけあるを薶毛といひ、薶毛に少し赤みのさしたものを月毛といひ、月毛に白みの多きを白月毛といふ。そして「知らぬ」と同頭韻語の修飾、即ち頭韻法。

○大磯 相模國中郡にあつて、東海道五十三次の一。今は東海道線の驛で、海水浴場がある。

○御二人 曾我兄弟。この邊哀れ深い妙文である。

○里 大磯の遊里。

○主 馬の主人曾我兄弟をさす。

○前輪 鞍骨の前の高くなつてゐる部分(ヤマガタのあたり)をいふ。後の高くなつてゐる部分を後輪(しづわ)といふ。

○ハイシイ 馬を追ふ聲。近松作「丹波興作侍夜の小むろぶし」道中雙六の條にも、「膝栗毛男は、いし、道中雙六」。

○足柄越え 相模國足柄上郡矢倉澤から、竹之下に出る足柄峠を越えること。

○露を蒔繪の箱根山 風荒く吹いて草木に宿

道と、成懺悔、~~~~懺悔を、何か菩提の道と成懺悔~~~~ゑ色に染み

又、香に愛で、拾ひ洩せる後世の種、闇の闇路を、如何にせん照せ三嶋の宮所、

御燈の光、しんくと心も、清き瑞籬に、馬上の母は手を合、祈る願ひの百千々

を言はで心に駒急ぐ、老木の、松は情無くて、初咲櫻・接穂梅、盛りの花の嫁達

の身には如何なる神無月、五月の雨の何時の間に涙の時雨染手綱、絞れど乾く隙

れる露を撒くを、蒔繪の箱にいひかけ、箱根山につづけた。

○つひに行く 死の道は誰も何時では必ず行く道であるによつて、死ぬるを遂に行くといふたのである。「古今集」哀鬱の部、兼平朝臣の歌に、「つひに行く道はかねて聞きしかぞ、昨日今日とは思はざりしを」。

○賽の河原 冥途の三途の川のはざり。小兒死して赴く所で、小兒が父母供養の爲に瓦礫を積んで塔を造れば、鬼が来て之を崩して下ふ。その時小兒は地藏菩薩の袖に隠れて身を免れるといふ。この文は、元箱根・蘆湖畔に賽の河原といふ所があるの、それにいひかけたのである。

○大人童の隔でなく 老少不定は世のならひにて。この文は、曾我二子をまかせて賽の河原をいひ、そして二子は既に成人してゐるから、大人童の隔でなくと、それをいひかく。

○菩提 梵語 Bodhi 正覺なごと譯す。真如の理を悟り道の極位に到達する聖智をいふ。

○懺悔 過去の罪愆を悔いて後悔すること。懺悔は佛道修行上の要素であり、菩提の道である。

○拾ひ洩せる後世の種 迷妄を去らず後生安樂を求めな

いこの意。種とは、よつて生ずる所をいひ、「拾ひ洩せる」に應じて種こゝうた。

○三嶋の宮所 伊豆國田方郡三嶋町にある三嶋神社を云ひ、事代主命を祀る。官幣大社であつて、鎌倉以後武士の尊崇厚く、武士の起請文には引合ひに出された明神である。今の社殿は明治一年の再建である。

○瑞籬 神社の籬。いがき。瑞はほめていふ。

○松はつれ無く 松はいつも色を變へねば、情なきに似るによつていふ。

○接穂梅 梅は穂を接ぎ、即ち接木にして仕立てるからかくいふ。

○神無月 陰曆十月の異稱。この文は、神に見はなされてこの憂き目を見るを神無月にかけて、月の縁から「五月」とつづけた。また神無月を受けて後に「時雨」といふたので、陰曆十月には關係がない。

○いつの間 五月雨はいつの間に忽ち時雨となる。但しその時雨は涙の時雨である。

○出で行く人 曾我兄弟。

○裾野 旅衣の裾を富士の裾野にいひかけた。

○うたてや なまげなや。

○駒の躰き氣遣はし 駒躰は小提燈の火も消え、馬から落ちばせぬかど氣遣ふのである。

○わくせき あくさく(鮫鱈)の鱈。せせかしう思ふこと。

○四つ 十時(三更)。

○黄瀬川 駿河國駿東郡にあつて、箱根・三島の通路上に當る古瀬。

○身に引締めて 我が身に引締める意であつて、思ひの切なるをいふ。しつかりと切に。

○氣ばへ 「氣延」の義。心はへ。氣性。

○じよさい 「如在」で、「ぞんざい」(存色)と等しく、ありの儘といふ事で、「丁寧にせぬ義であらう。政略。ぬかり。(二)の語は、「論語」の「祭如在、祭神如在」より出たといふ説はいかがい。

○おろせ 駕籠昇をいふ。「野良虫」(寛治二年刊)の序文に、「あんな乗物に載せられて、はい、おろせ〜と勇ま進む」とあるから、おろせは駕籠昇の掛聲であつたのが、駕籠昇をいふ事になつたのであらう。

○見よ 見よう。

○しめし 火を消し。濕潤の意から轉じたのである。

○鴨立澤 相模國中郡の名所で、大磯驛の西近くにある。西行法師が此處で「心なき身にもあはれ

ぞ無き出行人に遅れじと、笠取敢へず杖取らず常の姿を其儘に、今来て見れば旅

衣、裾野も近く成にけり星さへ見せぬ、松林、下は野澤のちり〜水裾は茨が綻

ばし、足は草履が杭や切株小石原、一寸先は開のうたてや小提燈、細蠟燭も仄暗

く駒の躰き氣遣はし、御狩場も早程近し、是から二人がお手を引いさそろ〜お

歩行」と、抱き下すも下さるもよろめきながら下り立て、ナフ嫁達、乗てさへ草

臥れる我身で思ひやらるゝ、もう何時ぞ心のわくせきする故か、鐘は四つやら夜

中やら聞捨て敷へもせず、更けた様に覺ゆるに狩場の方に物音は聞えずや、兄弟

が生死も誰か聞せん便なや」と歩みもやらず立給ふ、「お道理やさりながら、我々

が妹分木瀬川の龜菊と申者、祐經が氣に入て狩場へも呼れし故、御兄弟の御事を

身に引締めて頼しが、若けれども龜菊は侍勝りの氣ばへといひ、義理強ひは傾

城の習ひよもや如在は致まじ、あはれかし龜菊に逢ひたひ事や」といふ中に、草

の葉越しにちらつく火影邊を照して見へければ、「そりやこそ事よア、氣遣ひ、一

走行で見て來うか、跡も危しあれ〜」と、心ばかりを碎く間に次第に近附提燈

に、女交の笑ひ聲、「エ、氣遣ひない〜、皆廓の駕籠昇共、假屋〜へ呼ばれた

は知られけり、鴨立つ澤の秋の夕暮、と歌んだ事から、後には名所となり、地名になった。今も鴨立庵があつて、西行法師と虎御前との木像が祀られて居る。この庵の傍を流れる細流が鴨立澤であるといふ。

女郎衆の戻りと見た、若しあの中に龜菊の居やるかいざ待合せて問ふて見よ、母君は先暫し」と草の茂みに隠し置、小提灯の心切しめし待つとも知らでざゞめきて、一節唄ふ聲のあや、三年以前の五月間、鴨立澤の歸るさに、禿小三か誰やらが、螢を取て遊びなば、面白からではあるまいか」と、醉を進めし夜半の風、今の氣色に、吹送る、駕籠昇が癖は駕籠で振り、螢は光る淺瀬川、跨げじや」「まつかせ」乗物の、「乗手は知れた提灯に、上と下とは石壁中に二重の松皮菱、木瀬川の三浦とて、年前の大夫大彌太殿とは深い中、これも狩場へ呼寄せられしげれ松山羨しい、跡から見ゆるは誰ぞいの」、問はれて駕籠の簾より、招く扇や「開き扇は朝霧様、狩場の露でしつぼりと、濡れさんしたの」、濡れた印の三本傘雪折竹は奥州様、「五十餘人の松の手中管の上手め見たぞ遣らぬぞ」、「ヲ、いや

○禪を進めし：吹送る 禿が解うて登狩をすめたその時の夜半の風は、今の同じ時間じ所の同じ氣色に同じ吹送る。

○まつかせ 「任せておけ」の義。「よじきた」「合點ぢや」と同じ意の掛聲。近松作「卯月の潤色」中之卷に、「夢の浮橋一つ橋跨げじや、合點じや跨げじや合點じや手にも取られぬ圖無籠」とある。

○上と下とは：大彌太殿 舞の本「夜討會我」に、松かは三浦の平六兵衛よしむらのもんなり。いしたたみは信濃の國の柱入ねいの太夫大彌太と、あるを改作したのである。

○雪折竹 「夜討會我」に「ゆきをれたけ」。

○年前 年季詞。年季の明ける少し前。

○五十餘人 鎌倉時代、奥州五十四郡といへば、それをまかせて五十餘人といふた。「五十餘人」見たぞ遣らぬぞ」は少將の詞。

○しげれ松山 「しげれ松山しげらうには、木かけにしげれ松山」といふ頃の句に據つたもので、この唄は「閑陰集」に載せてある。「しげる」とは、ねや春するをいふ。この文は、太夫三浦と大彌太との房事をいうたものである。

○松 太夫をいひ、最上位の遊女をいふ。(見索引)

○開き扇は朝霧様 舞の本「夜討會我」に、「あ

○三本傘 無の本「夜討會我」に、「三本からかさ」。



松皮石



松皮菱



閉き扇



開き扇



雪折竹

○むの字 「無の字」である。無念の首音を取つて隠語的にふ隠語であつて、文字詞の類である。「ほれる」(鶴)を「ほの字」といへるもの類である。この文は、問はれないうちに此方から名乗らうと思つたに、問はれて言ふは先を取られて無念ながらの意。

○差合ひくらげ 差支へのやりくりせず。互に通慮する事なき意。

○一座 同席。會合。近松作「冥途の飛脚」上之巻に、「近日一座致したいとたくしくくれほ」。

○たらん べら〜と、しゃべるさま。

○道を早めて 奥州が道を早めて去るに、岩崎等が道を早めて来るをにかけていうた。

○いたらがひは岩崎様 舞の本「夜討會我」に、「いたがひは岩長たう」とあるを改作したのである。

○網の手は菅原殿 舞の本「夜討會我」に、「あみの手はすかいだう」とあるを改作した。

○舞うたる鶴は茨木屋の左門殿 舞の本「夜討會我」に、「舞たるはら左衛門」とあるを改作した。

○龜甲は輪違屋の花崎 舞の本「夜討會我」に、「きつかう。わちかひはなうつは」とあるを改作した。



鶴るたう舞



手の網



ひがらたい

悪口言ふは誰ぞいの、「問はれて言ふはむの字ながら虎でござんす」、「少將じや」、「珍しい問ふに及ぬ差合くらず、仲好しの兄弟御の假屋へか、龜菊様とも一座してお噂たらん、近い内逢はふぞゑ、先おさらば」と道を早めて、「それ其處へ、

いたら貝は岩崎様網の手は菅原殿、舞ふたる鶴は茨木屋の左門殿、龜甲は輪違屋の花崎か、一座のこなし逢ふ夜の譚大一大万大吉と、我を折烏帽子・立烏帽子・白一文字・黒一文字屋の山の井殿、竹に、雀は仙臺屋の陸奥殿、遣手は露の幸菱、

覺むる眠りの梅ばつちり、並んで二つ提灯は大和屋の唐土、名も高橋の紋所二人が心相駕籠で追々に昇き来る、急かる、心に虎・少將詞も掛けねば答もなく、過行跡から龜菊が、印は紛ひも嵐吹黄葉流しの紋提灯、「コレ龜菊殿、虎・少將じや物問はふ、乗物暫し」と留むれば、「待たも駕籠の衆」と、忙がし中をせはし夏草わ

くせき草にぞ下しける、「なふ逢ひたかつた二人様」、「此方等とても其通、して御兄弟のお身の上はどうぞいの」、「さればいな、言ふても言ふても御運の弱ひ御兄

弟、お袋様の御病氣とて俄に會我へお歸り、京の小四郎とやらが内通、何やかやで祐經とんと心を許しもう樂じや、今宵から假屋に足を延ばして、御狩中は緩り

○こなし 物のあしらひ、身の程よき所作をいふ。座配。

○譯 戀のいきまづ。戀の道。

○大一大方大吉 紋所の名。舞の本夜討會我しに下の如くある。

○折烏帽子。立烏帽子 舞の本夜討會我しに、「おりゑはししてまはし」とある。

○白一文字。山の井殿 舞の本「夜討會我しに、「しろ一文字」無一文字は山のうちのものなり」と、あるを改作したのである。

○竹に雀。陸奥殿 竹に雀は、陸奥五十四郡の總政所仙臺の伊達家の紋所なれば、かく改作した。

○遣手は露の幸菱 「遣手」とは、禿や遊女の體をなし、且つ監督し又掃屋で膳事の取持ちをする女で、赤前垂をなし腰に繩を吊してゐた。「露」とは小粒銀をいふ。遣手は遊客などから祝儀に小粒銀をもらひ幸にあふを、紋所の幸菱にいひかく。

○梅はつちり 「目はつちり」に、紋所「梅鉢」をいひかく。

大一大  
大一大  
大一大  
吉大万大一大



子帽烏折



子帽烏立



雀に竹



幸菱

と酒盛しよとの前工み、是は好い首尾御逗留の間には、何處ぞで本望遂げさせま

しよと心力の有し所、今日晝過八つ頭鎌倉より、二宮の太郎殿といふ人早打のお

使、頼朝様の弟蒲殿とやらが腹切らんしたといの、是も御兄弟について入譯あつ

てじやげな、それで假屋の騒動踊の崩れじやと思はんせ、それ故頼朝様も今

宵八つにお立鎌倉へお歸り、もし雨が三粒でも降れば明日五つにお立が延びる筈、

降ても照てもお先手は八つ立との御觸、荷を締めるやら何やらやくだいの有こと

か、妾等が様に假屋へ呼ばれた女郎衆、俄に里へ戻さるゝ此有様見て下んせ、

○提灯。唐土 提灯は日本のものなれど其の名は唐音であるから、かくいうた。

○名も高橋 名も高いを遊女高橋にいひかく。

○黄葉流 黄瀬川の縁による。

○忙がし中 「忙がし中」といふべきをかくいふは、近松作「博多小女郎波枕」長者經に、「ほしい物は買はぬが徳」といふべきをほし物は買はぬが徳」といへる類である。

○せはし夏草 「せはしないを夏草」といひかく。

○二人様 虎少將をさしていふ。

○お袋 母を敬うていふ語。こゝは曾我兄弟の母をさす。

○曾我 相模國足柄下郡下曾我村。

○京の小四郎 曾我二子の異父兄。工藤祐經の室に頼まれて間諜となり、曾我家に入込んで祐成、時宗の勲靜を悉く誦經に

密告した。

○八つ頭 八つ時午後二時の上刻。

○早打 馬に鞭打ち早く走らせて急報すること。早飛脚。

○蒲殿 源範頼。

○踊の崩れ 踊のすんだ後、人亂れて騒がしきをいふ。この形容遊女の言にふさはしい。

○八つ 二時。

○五つ 八時。

○やくたい 益體であつて、體は無體なさいふ體と同じ語であらう。(業殺その説もある)。「やくたいのある事か」とは、「やくたいもない」の反語にいうたのである。やくにも立たぬ。らちもない。

○里 遊里。魔。

○抱へるやうに思ふ 庇護しようと思ふ心を極言したるもの。身に引受けていたはり護りたいやうに思ふ。

○知る人 なじみ人。

○二人様 曾我兄弟をさす。

○くいくく くよく。近松作「山崎與次兵衛善の門松」に、涙人の身でなくはく、くいく、いうて恨み言。

○別れんす 「別れなすの應詞。」「ござります」を、「ござりんすといふの類。

○其の中え 其の中又違はうぞえ。

○しどけなかは 「しどけなし」に、「なかは」(半)をいひかく。「しどけなし」は解氣無しの轉か。亂れしまりがないの意。

○ぐりはま 「はまぐり」(蛤)の倒さ語。よつて物のあさましなる事にいふ。顛倒する(こと)。手ちがひ。

○命長きは恥多し 「莊子天地篇」に「壽則多辱。」「雖然草第七段」に「命長ければ恥多し」。

○稱名 南無阿彌陀佛の六字名號をさへる(こと)。

○胴慾 「ごんよく」(貪慾)の轉。非道。

○二人 虎少將。

○不孝の罪は子に報い 曾我二子が母を自害させるに至らぬ其不孝の罪は、曾我二子に報いが来るといふのである。

○わつと泣き お前はわつと泣き。

○など など。何として。何故に。

抱へる様に思ふても御運の悪い御兄弟、お知る人にならねども御二人様もおいと

しい、此方さん達お二人の心が察しやられて、妾や涙が溢れる、さりながらく

くいと思はんすな、來らぬ時節は是非がない、私も運が悪いは、まあ二三日狩場

に居れば、白兔の子もらふ物、何も時節と思はんせ、もう別れんす其中忍」と、

大事の咄引摘みしどけなかに言ひさして、駕籠を早めて急ぎ行く、母君堪へか

ね轉び出、龜菊とやらんの咄聞ました、ヲ、其方衆も悲しい筈母が心も推量あれ、

言ふ事爲す事ぐりはまに成曾我の運、長らへて幾何の憂目をか重ね見ん、命長き

は恥多し、嫁御さらば」と守刀を逆手に抜き持、南無阿彌陀南無阿彌陀佛」と

稱名の、聲より早く飛懸りもぎ放し、胴慾な御袋様、命を捨て、御兄弟の御爲

に成事ならば、二人が命惜しまふか望さへ叶はぬに母御に自害させまし、不孝の

罪は子に報ひ、一生御運は開けまい御兄弟がいとしくば、思ひ直して給はれ」と

緋り歎けばわつと泣、死て憂事聞まいとは子を思はぬに似たれども、母が身にも

成て見や、子共の爲にと病を作り、思設けし母が慈悲は仇と成、雨さへ降らねば

お立は今宵八つ立とや、顔振る間も有ることか假屋くの騒がしきに、若近寄て見

○物體無や、襟裾の滅び無くなる儀で、それを惜しむ意から轉じて、おそれ多いの意にいふ。「や」は感動の意を表はす助詞。

○命のつれない、早く死ぬればよいものを、命のあつかましくも長らふ。

○空目、見ぬふり。

○少將様、そなたは何と、虎の詞。

○夫を慕ひ石に成つたる女もある。「曾我物語」卷四に、松浦佐用姫が夫を慕ひ、石になつたことが見えてゐる。(これは「萬葉集」卷五に、欽明天皇の朝大伴狹手彦が朝命を奉じて三韓に渡る時、その妻松浦佐用姫が別れを惜しみ、山に登つて領巾を振つたことが載せてある。それと支那の望夫山の故事とを混同したのである。)

○流れの女、遊女をいふ。往時、遊廓は多く船着場などにあつて、遊女は舟に乗つて客に接したから、この稱があるといふ。

○心の疑ひ夏草、心の疑ひなく即ち偽りなく真心こめるを、夏草にいひかく。

○幣、御幣のこと。神に祈る時に、麻糸木綿紙などを切りて捧げる物。ここは草を結んで幣とした。

○南無、歸命頂禮の義。自己の頭を下げて佛・菩薩の足を禮拜する事で、信仰歸依の至極をあらはす最敬禮である。

○三嶋の大明神、「三嶋の宮所」を見よ。

○古曾部の能因法師、俗名水僧(ながや)す。和歌を能くす。初め文章生に補す。後禪變して攝津

咎められ盜賊成と擲められ、却つて憂目に逢おふかと、案ずる程身も顛はれ、自害せず其死かねまい、頼朝公の鎌倉入を留むるは雨ばかり、アレ／＼星もきらきらと雲の一筋あらばこそ、何故雨が降ものぞ降らずは望は叶ふまい、五月雨は五月の雨一日過れば六月よ、今宵は二十八日の五月の雨はなど降らぬ、月日に僞りましますかと、物體なや天道迄恨申も此母が、命のつれない故へぞかし空目して死なせてたも、刃物給もれ」と縫り附其手を直に抱き附、三人一處に顔見合せ、思はずわつと聲を上悶へ、焦れて嘆きしが、「少將様何と思召す、雨さへ降れば明日五つの御立とや、其間には御兄弟御本望は必定、お二人の名を下すも、名を揚げるも雨一つ、夫を慕ひ石に成たる女も有身こそ賤しき流れの女と成たれども、一念は誰に劣ふぞ、天道地神龍神も、流れの女は守るまじとの誓も無し、命に代へて天道へ雨を祈る心ざし、其方は何と」、「ヲ、我とても其通、死ぬるに二つの道は無い、サアサア早ふ」と勇み進めば母君も、「頼もしき心ざし思ひ込ふたる念力天道納受なからんや、我も共に」と立給へば、虎御前中に立心の疑ひ夏草を、結んで幣と禮拜し、眼を塞ぎ心中に、「南無や三嶋の大明神、傳へ聞古曾部の能因

國古曾部に降る。後六々撰の一人である。

◎百代水…神ならば神 「古今著聞集」卷五に、夏のはじめ早下國良がなほいでる時、能因法師が「あまの川苗代水にせきくたせ、天くたります神ならば神と、歌を詠んで三島の神に奉り、雨の降ることを祈つたので、大雨が降つた」とが見えてゐる。

◎日の御神 天照大御神。

◎雨寶童子 天照大御神をいふ。右手は金剛寶棒に支が、左手は掌上に寶珠をとりて立ち、頂上五輪塔塔ある姿を、天照大御神日向下生の御像としてゐる。「合撰大御用集」に「雨寶童子」俗云日神垂迹、本地大日。

◎天の下…大和歌 この文は、俗に小野小町の雨乞の歌に傳へられてゐる。「こわりや日の本なれば照りもしつ、さりさては又天が下まは」とある歌によつたものである。この歌は小野小町が雨乞の繪巻にも載り、「新撰狂歌集」にも載つてゐる。

◎三十一字 和歌をいふ。和歌は三十一文字のみそひともしである。

◎感應 もミ佛敎語で、詳しくは感應通交をいふ。衆生の信心力を感といひ、佛の大慈力及び法力を應といふ。通交とは、この信心力と大慈力とが往來交渉するをいふ。

◎普門品 「法華經」普門品、即ち「觀音經」である。

◎天龍八部 龍神八部ともいふ。天龍は八部衆に屬す。これを特出したのは八部衆で優秀な故である。八部は、天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・

法師、苗代水に堰き下せ、天降ります、神ならば神と、詠せし歌は國土の爲、日の本照す日の御神も、雨寶童子の御名は普き天の下、咎めて陳ねし大和歌、例も降り雨乞の、小野の小町も女なり、我も亦女なり、三十一字は陳ねずとも、妾が偽りなき心百首千首の和歌と成て、感應の雨を降り願ひを叶へおはしませ、日比信に奉る普門品の天龍八部、阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅、其外南海下海の龍神、二人の願女が一身の血をしぼつて雨となし、夫の大望母の歎を止め給へ、慈悲妙大雲澍甘露法雨、怖畏軍陣中念彼觀音力」と、虎・少將が小指を食裂き流る、涙諸共に、袖に浸して虚空に散らし、一身五體に汗を流し足を爪立て肝膽碎き、天を禮し地を拜し祈る心ぞ無慚なる、諸天も感應過たず、晴天忽常闇と虚空に閃く電光、足高山に雲披ひ、涙の雨を誘ひ來て、俄に降來る雨の脚條を、亂すが如くなり人人嬉しさ、有難さ濡るゝも厭はず伏拜みく、御本望の末頼もしく、袂を母に打被ひ狩場の方へ焦れ行く、されば五月二十八日に、今の世迄も降雨を、虎が涙や少將の夜の、雨とも、名に高き富士の裾野の、御狩の御遊鎌倉の騷動にて、急ぎ歸御有べしとの時刻も雨に事延びて、假屋の騒ぎも何時しかに辻の響も影薄

緊那羅 摩羅迦をいひ、普門品の中に見えてゐる。  
○阿修羅 無羅正又は非天と譯し、帝釋と常に  
戰ふ神である。

○迦樓羅 金翅鳥と譯し、龍蛇を食ふ。

○緊那羅 人に似て頭に角があるによつて、  
人非人と譯す。又帝釋天の法樂を奏する神なるによ  
つて、歌神とも譯す。

○摩睺羅 摩羅迦の略。大毘羅と譯し、腹行  
する地龍である。

○下海 蓋し外蕃であらう。鐵圍山に圍繞され  
た鹹海をいひ、四大洲はここにある。

○慈意妙大雲 念彼觀音力 觀世音の慈  
悲心の妙なるは、恰も大雲が萬象を掩へるが如くで  
ある。そして甘露の法雨をそいで衆生を恵み給は  
れる。又軍隊中に於てもおそれられる。これ等は彼  
の觀音の佛力を心念すれば、かくなるもの意。普門  
品に「慈意妙大雲、清甘露法雨、滅除煩惱烟、淨訟  
經官處、怖畏軍隊中、念彼觀音力、衆怨悉退散。」

○肝膽碎き 真心を盡め、真心を盡し。  
○無慚 罪を作りて心に悔むる所なき義、轉じて  
ふびん(不便)の意にいふ。

○諸天 上界の諸神。密教では天部の諸神をいふ。  
○足高山 愛嵐山とも書き、駿河國駿東・富士  
二郡に跨がる山。

○雨の脚 雨の降るのは線状に見えるので稱し  
た語。雨の線のしげくして風に亂れるを、篠を亂す  
やうたにいうた。

く、晝の疲れの手枕に短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びける、時節好しと曾我  
殿原、鬼王兄弟を古郷へ返し、出立祐成が装束は母上より給はりし、秋の野に草  
盡し縫ふたる練貫の單衣、群千鳥の直垂の袖を結んで肩に掛け、黒鞘卷の太刀を  
佩き竹の子笠の紐強く、上に下部の青合羽陣松明に道照させ、先に進めば五郎時  
宗、是も母より給はつたる白綾に鶴の丸縫ふたる袴衣、揚羽の蝶の直垂赤木の柄

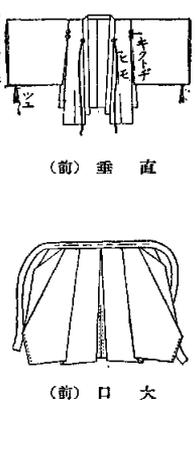
○御本望の末頼もしく 曾我兄弟が敵討の御本望を遂げ  
了せる其の時を、虎・少將は頼もしく思ひ。  
○虎が涙 五月二十八日に降る雨をいふ。「日次紀事」五月  
二十八日の條に、「虎御前忌。毎年今日多雨、俗謂今日大虎虎娘  
與曾我祐成相別、涙變爲雨、故今雨虎御前涙也。」

○少將の夜の雨 「瀧湘の夜の雨をいひかけた洒落。瀧湘  
は支那湖南省を流れてゐる二水の名。瀧水、湘水の合流するあた  
りは清流澄澈風光佳絶である。瀧湘の夜雨は所謂瀧湘八景の一  
である。

○三重 (見索引)  
○鎌倉の騒動 源範賴が鎌倉幕府に出頭し、梶原景高と口  
論して自刃した騒動をいふ。

○練貫 練絲(ねりぬき)の義。生絲を經こし練絲を緯として  
織つた絹布。

○直垂 もとは地下人、無位無官の者の服(足利義滿の頃か  
ら堂上來も著用す)で、露も胸の紐も裾もどが細縮である。そし  
て大口をはく。(足利時代からは長袴に定まる)。大口は装束の  
能の時にはく大口に似て、裁縫少し異なる。



○黒鞘卷 長さ八九寸の腰刀で、其の鞘は刻日なくて黒漆を  
塗つたもの。鞘巻は、下緒(さひき)を鞘に巻いて帯に留める刀  
の意。

○竹の子笠 笄皮を編んで作つた笠。

○陣松明 陣營に用ひる松明。「曾我物語」卷九、兄弟出立つ  
事の條に、「十郎松明振上げて」とある。

○揚羽の蝶の直垂 直垂の模様は揚羽の蝶を書いてある  
こと。「曾我物語」卷九、兄弟出立つ事の條に、「直垂に蝶を二つ  
三つ所々に書きたるに」とある。

○赤木 花例(くわりん)をいふ。紫羅に似た外國産の木。

○別當 箱根権現の別當をいふ。「曾我物語」太刀の由来の條に「兵庫鎮の太刀を別當取出し五郎に與ふ、此太刀は友切丸なり」といふ意が書いてある。

○友切丸 源頼光以來、源氏重代の名刀の名。其の友切丸を肩に打懸け擔うたのである。

○いかに 呼び掛けるときに發する感動詞。

○徒らに この文は、「今宵敵を討たずんば、母の御恩を徒らにし」の意。

○人口 人のうはさ。

○御料 貴人の敬稱。こゝは源頼朝をさす。

○蒲の入道 源頼朝をいふ。頼朝は蒲州蒲生御厨に生れたので蒲といふ。入道とは佛道に入つた者をいふ。

○借 貸である。西鶴本などにも「借ア貸の意」に用ひてある。「日本永代藏」卷二にも、「世界の借屋大將の「借屋」に「か」や「こ」傍訓してある。

○な そ 禁止の意を表はす。勿れ。「な」又は「そ」ばかりで禁止の意を表はすこともある。

○やはか いか下か。何として。

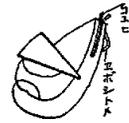
○波旬 梵語 *avara* の魔王の名。常に惡意を懷き、惡法を成就し、人の壽命を斷つといふ。釋尊が菩提樹下で修道された時に妨害を加へた羅魔である。

○懸鳥帽子 打懸鳥帽子のこと。折鳥帽子を冠り、脱げぬやうに後の針はかりでこめ置くこと。「貞丈雜記」卷三に、「古打かけあほしと云ふは、折懸ほしを小結も、てうづかけもかけずして頭におし入れ

の腰差、別當より給はつたる、源氏重代友切丸肩に打懸け紙合羽、締めたる笠の遅れじと跡に續いて出立たり、いかに時宗、母の御恩を徒らに今宵敵を討ずんば、不孝といひ世の人口生たる甲斐も有まじきに、天の恵みか降雨に、御料のお立は延引す狩場の用意も事靜まり、殊には蒲の入道殿借給はつたる此割符、頼朝公の膝下へも通路自由と聞なれば、祐經を討は案の内、假屋には定て遊女數多有べきぞ、罪作りに手な負せそ、雨は何時も降ながら、今宵の雨ぞ身には染む、討死せしと聞えなば思ひ切たる御心にも、母の歎は如何ばかり悲し、さよ」と涙ぐむ、

「仰にや及べき、祐經は籠中の鳥網代の魚、やはか洩し候べき、恐らくは此時宗天魔波旬に出合ふとも、ちつとも怯まぬ魂今宵の雨は身に掛かり、ぞつこん通つてわち」と物悲しう罷成、敵に出合働かば所々の死を遂げんも計られず、最期の杯一つ飲ふで給はれ」と、腰に附たる懸鳥帽子に降來る雨を受溜めて、祐成が手に渡せば、「なふ七度結びて兄と成、六度契りて弟と成と傳へ聞、死代り生代り兄弟の縁は切まじ」と、さらりと乾して指しければ時宗取つて押戴き、「兄は親にて候へば母上の御杯も是に籠り、天の甘露仙家の漿、此酒に勝らんや」と、

て、後の針はかりにて止め置くをいふなり、これ無禮の體なり」とある。てうづかけはちやうづかけ(眞頭掛)で、烏帽子の上からおとぎひに掛けて結ぶ紐をいふ。



子帽烏折

○七度結びて兄となり、六度契りて弟となる 人は七度生れかはるまいふ佛説を應用して、兄弟の縁の厚きをいうたものである。「頼朝密出」(先澤瑠璃)に「七度契りて兄となり、六度結びて弟となる」とある。

○兄は親にて候 陸に「兄が親ともいひ、親なき後は兄を親ませよ」ともいふ。

○こんづ こみづ(濃糞)の苦梗。白米を煮た汁おもゆ。

○をだやみ 「をやみし小止」に「だ」の添加した語。「武家義理物語」卷六に、「雨もをだやみて」。

○空さりげなく 空さありけなくの義で、即ち空は今雨を降らしたやうな、さやうな気色もなくの意。空を擬人したまごころ面白く、あわたたしい雨の一過後、洗ひ去られた天地の清さを思はせる。尤も近松のここの文は、「新古今集」卷三「夏歌の部、從三位賴政の歌に「庭の面はまた乾かぬに夕立の空さりけなく澄める月かな」と、あるに據つたのである。

○星々 散多の星をいふのではなくて「舞々」であらう。

○北斗 天の北極から約三十度の距離にある七つの星の群をいひ、北斗七星をいふ。

受ては飲みく降來る雨は恩愛の、親と妻との血の涙、親子夫婦の血を飲と思ひ知らぬぞ哀成、五月雨の一しきりおだやみて空さりげなく星々、北斗の光鮮かに晴れ渡れば、安西の彌七郎・新開の荒四郎、旅装束に下部を引具し、「雨も晴て候ぞ、君は明日五つの御發駕先手は追附お立の御用意」と、呼はらせ打て通る兄弟はつと顔見合、「此騒ぎに亂入、討て本望達せん」と袖すり違へ駈け通る、「コリヤコリヤ」と、何奴なれば御假屋の傍近く、斷りも無く忍び行、馬盗人が盜賊かそれ擲よ」とひしめけば、祐成騒がす「イヤ」と苦しからず、鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使、咎め立して方々が所領の仇ばし爲給ふな、疑はしくは見られよ」と首に懸けたる通路の割符、「是見られよ」と差出す兩人びつくり詞をかへ、「存せぬ事とて雑言申せし御免有、新開・安西各めたりとは、祐經殿へは必沙汰なしに頼入、假屋へは此辻を左へ切れ、行當りの大構いざ御通り候へ」と、馬鹿殿懃の空輕薄、結句敵の引入を爲濟し、顔にぞ別れる、兄弟遁る、鰐の口虎の威を藉る

○五つ 八時。

○打つて通る 馬に鞭をあてて過ぎ行く。

○所領の仇ばし 所領を奪はれる事の意。「はしは意を強める接尾語。今でも三重縣地方では口語に用ひてゐる。

○空輕薄 親切な心なくしてお世辭をいふこと。

○鰐の口 危険身にせまる場合にいふ語。近松作「軍井筒」下巻に「高津の町を急ぎ通る、鰐の口や。」

○虎の威を藉る此割符 「虎の威を藉る狐」といふ語を應用してかくうた。

○蒲殿 薄人清源殿をさす。

○御料 源頼朝をさす(既出)

○秩父 唐山重忠。

○小具足 鎧に具したる小具足の義。「軍用記」に、「小具足といふは、鎧をば著すして腹當に籠手、脚當を著するなり」とある。

○波に揺らるる：此方ぞ 曾我兄弟を波に揺られてゐる沖の船に登へ、目指す敵工藤祐經の假屋を、船のたよるべき磯にせりなして救へるのである。ここの文は曾我物語卷九、祐經討らし事の條に見えて、「知る邊の磯は「知る邊の山」となつてゐる。

○無二無三 傍目も振らず一心なること。この語も「法華經」に「唯有一乘法、無二亦無三」とあるより出づ。

○兄弟が耳に口を寄せ 近經は兄弟の耳に口を寄せ。

○會稽の恥を雪ぐ 支那春秋時代、越王勾踐と吳王夫差と戦ひ、勾踐敗れて會稽山に據り降を請うた。後に勾踐の臣范蠡の謀によつて吳を滅して、其の恥辱を雪いだ。「史記」貨殖傳に、「范蠡既雪會稽之恥」。この故事よりして、恥辱を受けたものに對して報復することにいふ。

此割符、蒲殿の御恩ぞと、御料の假屋の傍近く忍び入こそ危けれ、左右の假屋騒ぎ立「お先手は發足の御觸有、合羽は取置腰鏡を取落すな、馬よ鞍よ」とひしめけば兄弟彌氣も急かれ、「祐經が假屋とてもさぞあらん、是迄忍びし甲斐もなく此兩の降止む事、神明にも見放されよつく武運に盡きしか」と、拳を握り齒を鳴し虚空を、睨んで立たる所に、秩父の執權本多の次郎近經小具足に身を固め、本陣の夜廻りしてげるが、曾我殿原と見るよりも近々と歩み來る、兄弟「誰ぞ」と咎むれば「波に揺らるる、沖津船、知る邊の磯は此方ぞ」と囁く聲に祐成はつと嬉しく、「重忠公の御情又は御身の御懇情、此度に限らねども、御禮申事もなく禮儀知らずとや思されん、今宵年來の厚望を達せんと存る所、俄に雨晴れ假屋へは出足の用意、此騒ぎには覺束なし此儘歸つて何時の時をか期すべき、無二無三切込で兄弟屍を曝す所存、重忠公へ一生積る御禮は、貴殿の執成頼入る」といひければ兄弟が耳に口を寄せ、「氣遣はし爲給ふな、祐經は明日君の御馬の御供、それ故假屋も寝靜まる、此方へ此方へ靜に」と道の案内の杖柱、嬉しさ類はなかりけり、是こそ祐經が臥所なり、心靜に本意を遂げ會稽の恥を雪がれよ」と、いと念比

- 御案内の程 御案内にあづかつた御恩の程。
- 五百生の體を焼く 一念の執著の爲に五百生(五百度生れかはこの)の長きに亘つて、其の業報を受けて體を焼くの意。佛説に「一念五百生、繫念無量劫」とあるによつて、かくいうた。
- 隨つて 屍を曝す所存なれば、隨つて。
- 勘氣 勘當の氣色の義。おしかりを藏つてしりぞけられること。不興。
- 伊藤が末 曾我兄弟は、源頼朝の敵となつた伊東次郎頼朝の孫なれば、かくいふ。
- ゆめく 疎略候まじ 決してくおろそかに致し申すまい。必ず鄭重にするつもりでござる。「ゆめく」は強く禁止する意をなす副詞であつて、下に打消又は禁止の語に應じる。
- 弓矢 武士の意。昔時武士は弓矢を以て功名を立てたれはかくいふ。槍を以て功名を立てるやうになつては、槍取といふ。
- 木戸 柵門(きき)の義。柵に設けた門。
- 胸寄 門前などに設けて馬の奔逸を防ぐ柵。
- 鈍臭い 馬鹿くさい。
- 雨が延びて来たお立が降る 「雨が降つて来たお立が延びる」といふを、狼狽して詞が轉倒する様を寫した。
- 雨の脚音 雨の降る音。「雨の脚は前に解いた。
- 三重 (見索引)

の詞に縫り、御案内の程五百生の體を焼くとも、いかでか報じ盡すべき、隨つて通路の此割符、蒲の入道殿より密かに拜借申せしかど、御切腹の跡なれば返辨申さん様もなし、我々が死骸にあれば、蒲殿こそ御勘氣の伊藤が末の曾我に組し、反逆の族よと死後の虚名に御屍を汚さん事、御恩を却つて仇にて報ずる理、近經殿に預け置然べく頼存る」と、二枚の小札を手に渡せば「尤々近經に任せよ、主人重忠悪しくは計らひ申されまじ、老母の事もゆめく疎略候まじ、今暫くと存づれども役目なれば知らぬ顔、弓矢の禮儀是迄」と本多は、假屋に入にけり、「今は何をか期すべき」と兄弟台羽かなぐり捨て、「本多が教し敵の假屋は是なり」と、木戸駒寄を飛越へ跳越へ兄弟莞爾と打笑ひ、天にも昇る心地にて難無く臥所に討て入、次に臥たる宿直の侍、足音に目を覺し、「すは盗人よ」と呼はつて逃出る、假屋に聞附て、「ソリヤ盗人よ御立よ」と、騒ぎの上に又混亂、相圖響かす太鼓鉦かんくどんく鈍臭い、又雨が延びて来たお立が降」と人も有、雨の脚音さつさ、人の足音どろろ右往左往にもてかへす、其際に兄弟は、敵工藤祐經を思ひのまゝに討おほせ、門外に走出袂を絞つて喉を潤し、勢猛

○さはなし さやうにあらず。

○止めを刺さぬはうろたへたり 「實我

物語 卷九 祐經に止めを刺す事の條に「止めは敵討つての法なり、實檢の時止めの無きは敵討ちたるに人らず」とある。

○六根の罪障 眼耳鼻舌身意を六根といふ。「根」は草木の根の如く、増上の強き作用を與へるもの謂である。六根によつて作る罪を六根罪障といふ。

○不退の彼岸 阿彌陀佛の極樂淨土をいふ。この地に生ずる者は、再び落界に退轉する事なきが故にかくいふ。「無量壽經」に「普悉到彼岸、自致不退轉」。

○差添 刀に添へて差す短刀。さすが。

○見參 お目見え。御對面。

○さすが 刺刀の義。五寸乃至八寸程な腰刀。

○御邊 對稱代名詞で回單に用ひる。そのもと。貴殿「きでん」。

○一蓮托生 死後諸共に極樂淨土に往生して、身を同一蓮華座上に托すること。そして一蓮に一蓮をいひかく。一蓮托生の縁で、「南無阿彌陀佛」とつづけた。

○手指す 手出する。

○落ちば 逃げるなら。

に立たりし心の内こそ嬉しけれ、エ、心地よい時宗、年月の思ひに比ぶれば敵を討は易かりしな、餘り嬉しさ心急いで忘れしが、祐經に止め刺しつるか」と問ければ、「あれ程に切上は何の仔細か候べき」、「いやさはなし跡にて實檢あらん時、敵を討は討たれども、止めを刺さぬは狼狽へたりと言はれんは、屍の上の恥辱をかし五郎、如何に」と有ければ、「尤」と打領き、誰をか恐れ忍ぶべき、のつさのつさ假屋の歩板ぐはつたゞ踏鳴して引返し、障子襖はらくと蹴放し、祐經が死骸にどうど跨がり、よく聞け祐經、一念の瞋恚によつて敵と成味方と成、六根の罪障消滅し不退の彼岸に到れよ」と、腰の差添引ん抜き、「そも此刀は箱根にて初て見參したる時、得させたる赤木の刺刀、御邊元の主なれば鐵の味は知つらん、只今返す受取れ」と右手の耳の下よりも、左手へ通れと刺す程に耳と口とを一蓮托生、南無阿彌陀佛」と回向して、元の所へ立歸るに手指す者さへ無かりけり、祐成待受「落ちば此ま、落べけれども、隠れ忍んで一生を暮さんは生たる甲斐は有まじ、一足にても逃とは弓矢の恥辱、殊更我々故に御生害有蒲殿の御恩、御供申さで叶はぬ命、浪人の我々が鎗太刀と奉公日の出の殿原が、刃を試して討

○親の敵：討留めたり 曾我兄弟が聲をあはせて叫ぶのである。

○弓取 武士をいふ。武士の精神をそなへた者の意にいうたのである。

○をり合ひて 「折合ひ」で、其の場に来り臨んでの意。出合ひて。近松作「國性爺合戦」第一に、「公家にも武家にも難有て、をり合ふ、味方のあらざれば」。

○文色あいろ 「あやいろの約。物の色目。差別。この語は多く下に「分かず」「見えず」などの打消で受ける。

○見えざるに 見えざるによつて。

○たいまつ たきまつ（焚松）の音便。乾いた竹や藁を束ね、松脂を挿んで造る。或は竹や木片を束ねても造る。これに火を點じ暗夜を照すに用ひる。

○入替へ 互に入りかへり。

○尻しりこぶた しりたぶら。しりべた。

○緋緘の鎧 緋色の緋又は革でおむした鎧。「おどし」とは、鎧の小札（「ざね」を緋又は革で綴つたもの。「おどし」は普通「をさほし」の義ともいふ。

死せん」「尤」と、二人等しく大音上、伊豆の國の住人伊藤の次郎祐近が孫、河

津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成」「同じく五郎時宗、「親の敵工藤左衛門

祐經を討留めたり」「頼朝公の御内に弓取はなきか」「おり合て討留めよ」と呼

はつて邊りを睨んで控へたり、暗さは暗し雨は降、假屋／＼に「すは夜討」と弓

一挺太刀一振に、五人三人取附いて「我よ人よ」と奪合ひ、繫ぎ馬に鞭打て遅し

とあせる所も有、鎧に迂り兜に躓き、籠手を膺當草鞋を笠、上を下へとひしめけ

ば御馬屋の徳竹大聲上、物の文色も見へざるに松明出せ」と呼ばれば、二千軒の

假屋より、籠・鞞・蓑・竹笠、傘・箆に至るまで火を附て投出せば、裾野の闇は

忽に百千の朝日影、一度に照す如くなり、騒ぎの中より名乗りかけ／＼、切て

出れば兄弟は小柴垣を小楯に取入替へ、／＼名乗り替へ、火花を散して雨交り揉

み立、／＼戦ひける、腕首切られて引も有頼先・肩先・尻こぶた、左手の太股右

手の足首、やにはに切られて死するも有、されども兄弟薄手も負はず血氣に進む

時宗は、假屋に人種絶さんと御所の間近く切て入、祐成は柴垣の陰に息をぞ休け

る、假屋／＼の松明も降来る雨に打消され、東西暗き木陰より、緋緘の鎧著て二

○富士の人穴 富士山麓の高士郡にある穴である。嘗て仁田四郎忠常が源頼家の命によつて從者五人を連れてこの穴に入り、從者を皆失ひ、忠常のみが生還したといふ。「源頼朝」に、「予この穴に入るこゝと三十間ばかり、内の様子をを見るに、野のほとりまでひたり、中々先へ行く事を得ず、寒き毒草中に立居るが如し、云々」。

○狩倉 狩くら(狩蔵)の義。猪や鹿などの狩をして獲物を蔵ふこと。

○虎より猛き猪を乗留め この事は「曾我物語」卷八、仁田が猪に乗る事の條に見ゆ。

○仁田の四郎忠常 實は二宮太郎安濟である。

○物々し 物體らしいの義。もと相手なる物らしくあり、その價値を認める義であつたのが轉じて、たゞさうらしい、をこがましいの意にいふ。

○木の葉武者 木の葉の風に吹き散らされる如き無氣力な武者。

○獄門 もと斬罪に處せられた重罪犯人の首を、獄舎の門の邊の木に懸けて晒したこと。後には刑場などに於けるさらしぐばをいふ。

○ござめり 「こぞあるめり」の約であらうだ。

○曲者 怪しい者。一くせある者、わるいもの。體頭屋本「節用集」に「怪物」くせもの。

○見參 見まらすこと。對面の敬語。

○似たくしき表裏者 「似たに」仁田をいひかけ、いかに仁田によく似てゐても、うはべさうちとの相違する者。

尺餘りの打刀、三尺五寸の大太刀横たへ、四十足らずの武者一人のつき、くんと  
 動き出、抑是は先年上意を被り富士の人穴に入て、地獄の底迄名を顯し、此度の  
 狩倉には虎より猛き猪を乗留め、日本無双と譽を一天に輝かす、仁田の四郎忠常  
 とは我事、物々し曾我殿原、思ふ敵は祐經一人、木の葉武者五十百切たる逆何の  
 益か有、仁田の四郎が手に掛かり御勘氣の者の末孫と、獄門の恥が受たくはいざ  
 来いやつとぞ罵つたる、ヲ、よい敵ござめり、仁田なればとて、必勝にも極ら  
 ず、人穴の地獄の鬼、猪など相手にしたとは違ふべし、十郎祐成手並を見よ  
 と打てかゝる、エ、無分別者は非なし」と、閃めく太刀影雨夜の星電火を飛ばし  
 て切り結ぶ、更に勝負も無かつし所に、花やかに鏡ふたる武者一人、坂東聲を打  
 揚げ「あら穢らはし、我名を盗む曲者高名を食るか、伊豆の國の住人、仁田の四  
 郎忠常とは我事見參せん」と呼ばはつたり、祐成飛退り、「六十餘州は廣けれど、も、  
 頼朝の幕下に仁田ならで武士は無きかあら仰々し、瘦浪人一人か二人討たんと  
 て、彼も仁田是も仁田似たくしき表裏者、二人共に餘さじ物」と打てかゝる、  
 ヤア跡から出て仁田とは人真似か、祐成は討せじ」と懸隔たれば掻潜り、打附

○餘さじ 生残らさじ。

○懸隔たれば 懸隔つればの意。中間に分入つて雙方の隔てをなす。

○陽に開いて 陰に閉ぢ 積極的に攻勢に出るを「陽に開く」といひ、消極的に守勢に出るを「陰に閉ぢ」といふ。「本手記」巻十に、「六萬餘騎の兵を一手に合はせて、陽に開きて中にまじりこめんと勇みけり、義貞の兵之を見て、陰に閉ぢて中を破られじとす。」

○後の仁田 誠の仁田四郎忠常である。

○高股 股(もも)の上方。

○かひも 「かひな(脇)も」であらう。「曾我物語」巻九、祐成討死の事の條に、「敵に打合ひて脇さがり力も弱り」とある。

○犬居 犬の腰(うづこ)の義。尻餅ついて兩手を地に突き居ること。

○死出の山 冥土にある山で、人死して總え行くところ(既出)。

○名字盜 仁田四郎忠常の氏名を盗んで名乗つた者。この所は仁田の詞。

○面縛 兩手を背にまはして縛り、面を前方にさし出したこと。

○鬼死すれば狐これを悲しむ 同類の者に禍が及ぶであらうと思つて悲しむのである。「通俗編」に「鬼死狐悲」。

○かかん 「掛(か)か(か)らん」であらう。

○御分別 好思慮。これは二宮の鄙劣な行爲を

くれば懸隔て、祐成一人に仁田は二人入亂れて採合しが、陽に開いて打太刀を後

の仁田が陰に閉ぢ、受流して裾を薙ぐ、祐成が右手の高股、膝口掛けて切落され、

左手ばかりの片足立ち二打三打打つかひも、百手を碎く氣も弱り、犬居にどうど

轉びしが、弟の時宗は何處にぞ祐成こそ討れたれ、死出の山にて待べきぞ、いふ

事も是迄サア、何れなりとも首を討て、怯れたるか」と、聲かくる、「イヤ討手の

實否紛らはしく、冥路の障りも悼はし、誠の仁田が面を見せ、名字盜を面縛さ

せん松明出せ」と呼ばれば、忠常が下部ども提燈取て差上ぐる、仁田と仁田が顔

差し合「ヤア二宮、以前仁田と名乗つづるは御邊よな、扱淺ましやヤイ、鬼死す

れば狐是を悲しむとは、同じ類に禍の來らんことを痛むゆへ、元縁者の端くれ、

御咎めの飛沫か、ん事を痛み、祐成を討て一味せぬ身の言分とははて好い思案、

女房を離別せしは、他人に成て兄弟が力とならん心底尤、かく有べき事と感心せ

しに、扱は立身の爲の離別か御分別、よしなき仁田呼ばはりが奇怪さ、思はず

駈合はせ可惜者を、手に懸けし残念さよ」と大きに怒つて恥しむる、二宮か

深くにくんで反言したものである。

○彌猴が帝釋天を嘲る 「猿が佛を笑ふこと  
もいふ。小智の者は大智の者を測り知る能はざる猿  
の誑。佛經では彌猴を以て多くは凡夫心に喩ふ。

○指果報 人の指紋・手筋などを見て果報を占ふ  
こと。轉じて傀儡、こぼれざいはひの意にいふ。

○物打 太刀などで物を打切る時、その物に最も  
觸れる所、即ち切先三寸の所。

ら〜と笑ひ、彌猴が帝釋天を嘲るとやら、己れが足らざるを以て、人の大智を計  
らんとして却つて愚癡が顯はるゝ、二宮が曾我を討んと思はゞ、今日迄何の待べ  
きぞ、生半功有男と思ひ名字を借つて追散し、某他人に成たる徳天下晴れて匿ま  
へ置、時節を待て世に出さんと手を取て、引ぬばかりにあしらへども、祐成たじ  
ろかねば詮方なし、手柄は爲たし怖くはあり、二宮が聲を後楯に駈合、溢れ幸  
指果報、可惜若者を思はず討て残念など、は、義を知つた武士の言ふ事、猪に乗  
て高名とする獵師風情の言分には、過た〜と言はせもあへず、ヤア小舅を仕  
留めんとする程の不仁者、武士の情は存も寄るまい、祐成が首は御邊急ぎ討て手  
柄にせい、「イヤ人に囉ふて手柄にする安清ならず、御邊討て手柄にせい」、「イ  
ヤ二宮討て」、「仁田討て」、「二宮討て」と責め懸けられ、「ヲ、小舅の曾我を討つ  
刀、二宮は持合せず、是で討れば御邊討て」と祐成と切合せし、太刀をからりと  
投出す、忠常押つ取提燈に透して見ればこは如何に、物打より切先迄刃を石にて  
叩き潰し、打みしやいだる榎同然、ム、最前より此太刀にて討真似したるか、ア  
ツア頼もしとも優しとも、弓矢取身の手本ぞや、雑言御免二宮殿、「それこそ互

○和殿 我が殿の義。對等に用ひる對稱代名詞。

○不覺の落涙 そぞろに涙をこぼすこと。「不覺」は覺悟のたしかならぬこと。

○八つ 二時。「鳥も鳴く」とあるは、鶉の啼に第一に鳴く。一番鳴きは明け八つ時であるによつてかくいうた。

○千鳥の直垂 前文、祐成の出で立つ裝束をいへる條に、「群千鳥の直垂の袖を結んで肩に掛け」とある。

○曾我兄弟が會稽山 本曲の題名はこれから出た。會稽山に就いては、前文「會稽の恥を雪ぐ」のかりで述べた。

○眠を覺しける 惱氣を引立てた。「曾我物語」卷九、祐成討死の事の條に、「親の爲に命を軽くし、屍は路邊の成に捨てられども、名をば龍門の雲窟に揚ぐる、あはれいふもおろかなり」とある。

悪口御免仁田殿、和殿の如く情有友を持たる五郎・十郎、御分の如く誠有、縁者を持たる曾我殿原、「一生花實も咲かざりし」、「天運の拙さよ」と、二人不覺の落涙に鎧の、袖をぞ絞りける、今を限りの祐成起直り、「縁者と申も元は、他人の二宮殿、好みなき仁田殿御芳志は、五百生、生替り死替るとも忘るまじ、御手に懸り討るゝ事、祐成はなんばう果報の者、首討てたべ疾く」と、言へども二人涙に暮れ、差俯向いて居る所に御所の方より聲々に、「曾我の五郎時宗御前近く亂れ入、御所の五郎丸が組止め、御假屋安穩なり」と呼ばはる聲に祐成、「あれ聞給へ、時宗は召捕られしとや、祐成が最期如何にと案すべし、疾く首討て兄が最期清かりしと、悦せてたべ仁田殿頼入、南無阿彌陀佛、彌陀佛」と首差延べて目を閉づる、「名ざしの上は、承る御心安かれ」と、太刀抜き持て後に廻り、振上ぐれば祐成が、首は前にぞ遠方に早曉の八つの鐘、鳥も鳴く、人も泣音を鳴く千鳥の、直垂に首よ涙よ包みても、洩て名高き富士の嶽曾我、兄弟が會稽山、骸は裾野に埋ども譽は三保の松の風、他の國迄吹傳へ昔、語を今の世の人の、眠を覺しける

第五 (大團圓)

登場人物の主な者

- 梶原平次景高(頼朝近侍の俊臣)
- 源頼朝(鎌倉將軍)
- 曾我五郎時宗(河津三郎の子。祐成の弟。二十歳)
- 曾我兄弟の母
- 朝比奈三郎義秀(頼朝近侍の勇士。巴御前の子)
- 京の小四郎(曾我兄弟の異父兄。祐經の間諜)
- 虎御前(大磯の遊女。祐成の愛人)
- 諸大名諸軍勢
- 大江廣元(因幡守。頼朝の重臣)
- 御所の五郎丸(頼朝近侍の臣)
- 少將(化粧坂の遊女。時宗の愛人)

梗概

頼朝公の御狩の御遊も事終り、建久四年五月二十九日の曉、梶原平次景高・朝比奈三郎義秀が、頼朝公の御迎として參上する。諸大名は皆御供の扮立てで廣廂に伺候する。

因幡守大江廣元は、頼朝公の御裁許を仰がうとして、御狩中に於ける諸人の奏狀・訴狀等の數通を取出し、曾我兄弟が假屋に亂入した時、深手を負うた者どもを讀上ける。頼朝「暫くく。悉く聞くに及ばず。それ等は手柄でない。其の狀を燒棄てよ」。

次に廣元は仁田四郎忠常の奏狀を讀む。頼朝は之を聞いて二宮太郎安清と忠常との武功を知り、深く之を譽めた後、「安清は離別した妻を呼戻し、曾我の老母をも介抱せよ」といひ渡す。

次に藤澤寺の住持瑞阿上人の訴狀に、「梶原景高が無法にも拙僧をはじめ寺僧どもを残らず搦め、自身鐘を撞いて近在隣郷刻限を混亂させ申候」とあつた。頼朝公の氣色損じ、「景高を和田義盛に預けよ」と命じる。景高は言譯をしようとして、朝比奈三郎義秀に毆打されて搦められる。次に京の小四郎も頼朝公の命によつて搦められる。

御所の五郎丸は頼朝公の命を受けて、繩附の時宗を白洲に引据ゑ、「此奴兄弟狼藉の餘り、この者御寢所近く亂入し、御身邊氣

遣はれました所、某難なく組留めました」と言上する。時宗これを聞いて、「黙れ」と叫んで御前の方に振向き、「恐れ多く存じますが、武士の家に生れて親の敵を討つは、狼藉とも僻事とも申されますまい。只今召されましたのは、御座處近く切入つた御咎めでござりませう。某が名乗を上げて一人も手に立つ者なく、逃足強い者ばかりなれば、功ある武士に出合ひ討死せばやと存じ、奥深く切入りました。其の時御前におかせられては討出ようと言われたを、年少な大友の市法師が「曾我兄弟がいかに強くとも、御手をお下しあそばされるは物體なし。殿原に仰せ附けられ給へ」と、諫め申したを仄に聞き、しをらしい者と感じ入り、この市法師の手にかかつて討死しようと思ひ、五郎丸が薄衣を被つて某に抱附いたのを、大友の市法師と思ひ誤り、易々と搦められたのは悔しう存じます。しかし今更申しても詮ない事。とくく首を召されよ」と、言葉すすしく言上する。

五郎丸「その廣言片腹いたい。某が抱附いた時、汝は手足をもがき、ゆるせくと大聲上げてほえたを忘れたか。由ない事をいふよりも念佛を申せ」と嘲る。五郎丸くくくと吹出し、「ヤア汝が力に搦められぬ證據これ見よ」とて、うんと金剛力を出せば、高小手の繩ふつと切れ、五郎丸に飛掛つて捻伏せ、「さあま一度搦めて見よ」とて、五郎丸の胸骨を挫けてのけと突けば、五郎丸は痛みに堪へかねて涙をこぼす。

折から義秀は京の小四郎の細首を撮み、提げ來つて打附ける。頼朝「汝は親兄弟に逆ひ、敵に組した無道者。冥途に行つて祐經に奉公せよ」。時宗謹んで頭を下げ、「さぞ祐成も草葉の蔭から有難く存するでございませう。さりながら父こそ異れども兄は兄。何卒彼の助命を願ひ奉ります」。頼朝「時宗に免じて彼の命を助け、剃こほつて追拂へ」。義秀「承知仕りました」とて、頭髪を免つて追立てる。

時宗「もはや此の世に用なき我。サア寄つて繩掛けられよ」とて、後手になつて待つ。雑色ども寄つて繩を掛けようとする。頼朝「暫くく。一騎當千の勇士を失ふは残念ながら、國法は是非もない。五郎が繩は頼朝が手づから打つて遣はさう」とて、白洲を降りて時宗を搦め、わが打つ繩は鎌倉將軍の力を以て懸けた繩ぞ、恨むな。時宗わつと聲を上げ、「今一度生れ替り、情

深い君の御馬前に討死したや」と泣く。満座の武士感激し、繩に手を懸けて結縁する。

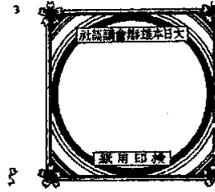
御門に控へた虎・少將は、曾我の老母を誘つて走り入り、君を禮し時宗の繩に縋つて感泣する。折から打出す鐘の明け七つ  
時四、門に御馬の嘶ふ聲「はや御立ち」と呼ばはり、諸軍勢頼朝公に附添ひ、鎌倉さして發足する。

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷  
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書  
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)  
電話(34) 代表 五六二〇〇番  
牛込(34) 六二〇〇番  
五六二〇〇番

(本製地海天)